

鵠沼

久久比奴末

はまゆうと桜貝と

海光るわが故里

第 8 8 号

クゲヌマランの初出について	伊藤 聖 ...	1
鵠沼海岸の桜貝	松岡 喬 ...	9
与謝野晶子鵠沼の歌	中山 成彬 ...	12
福永陽一郎と蕨沢市民オペラ【下】	渡部 瞭 ...	14
再録 鵠沼公民館と私	福永陽一郎 ...	24
僕と福永先生	塚本 雅一 ...	26
菅沼五郎さんの事	矢田 健爾 ...	32
彫刻家菅沼五郎先生	桑原 玲子 ...	34
菅沼五郎夫人について	鈴木三男吉 ...	37
私と鵠沼宮之前的祭囃子	小林 偉利 ...	41
鵠青会の思い出	内田 英一 ...	42
鵠沼の歴史的家屋をたずねて⑪		
浅場家宅相図について	岡田 哲明 ...	44
「首塚」の碑と野村靖	松岡 喬 ...	49
鵠沼松が岡の開発と大給家について	有田 裕一 ...	53
「鵠沼を語る会」活動の記録	総務委員会 ...	65
編集後記		68

『新編相模風土記』(天保13年、1842)に、「鵠沼村久久比奴末良」

とあり、当時は“くぐいぬま”と呼んでいたことが分かる。

鵠沼を語る会 発行

クゲヌマランの初出について

伊藤 聖 (会員)

クゲヌマラン (鵠沼蘭) は昭和 10 年 (1935 年)、東京帝国大学の服部静夫博士によって鵠沼で発見されたことからその名がついている。戦後は土地開発がすすみ、クゲヌマランも絶滅したのではないかとされていたが、「鵠沼を語る会」の元会長、故塩沢務氏の長年にわたる努力の結果、番場定孝会員の働きかけもあって同 58 年 (1983 年) 48 年ぶりに再発見された。

塩沢氏の貴重な資料は、いずれ鵠沼公民館の市民センター「郷土資料展示室」に収められる予定だが、クゲヌマランの初出について同氏の資料を整理し、大場秀章東京大学総合研究博物館教授、浅井康宏東京歯科大学名誉教授 (前副学長)、磯野直秀慶応大学名誉教授らのご教示とあわせて紹介したい。

クゲヌマラン発見のいきさつ

昭和 7 年 (1932 年)、東京帝国大学助教授の服部静夫博士 (植物生化学) は鵠沼で病氣療養中であった。最初の住所は藤沢町鵠沼下綱 5522 (現鵠沼海岸 3-9) で、後に鵠沼下岡 6703 (現鵠沼松が岡 3-5) の湘南学園通りピノキオ文具店があったところに移った (注 1)。

同 10 年の春、博士はいつもの散歩の途中で、白い花をつけた清楚なランに気づいた。まだ学術的に記載されていない新種ではないだろうかと思い、その研究を前川文夫氏 (のちに東大教授・理博) に託した。前川氏は当時、東大植物学科の中井猛之進門下の新進で、植物分類学を専攻していた。

服部博士がクゲヌマランを発見した日時や場所は分らないが、4 月下旬から 5 月にかけてではないかと思われる。現在でも、そのころ開花をみるからである。また場所も同博士が住んでいた湘南学園付近とみて、それほど隔たっていないであろう。



服部静夫博士

初出は『東亜植物図説』

前川文夫氏は1年後の昭和11年9月発刊の中井猛之進監輯『東亜植物図説』(春陽堂)にクゲヌマランの図版「第XXVI図」

(右ページ)と日本語、ラテン語の解説(4、5ページ)を発表した。これがクゲヌマランの初出(原記載)と思われる。前川博士は昭和49年刊行の『原色日本のラン』により詳細な記載をしている(注2)。

『東亜植物図説』は一冊のまとまった図鑑ではなく、何冊かの雑誌形式になった菊判の専門誌で、クゲヌマランはその第一巻、第三輯に載っている。

解説に「相模鵠沼ノ砂地ニはまかきらんト混ジテ生ズ。服部静夫氏ノ発見ニカ、ルヲ以テソノ名ヲ種名トセリ」と発見者の名をとって種小名 *shizuoi* としたことを明記している。属名の *Cephalanthera* は「頭状の^{ハナ}葯のある」の意味という。

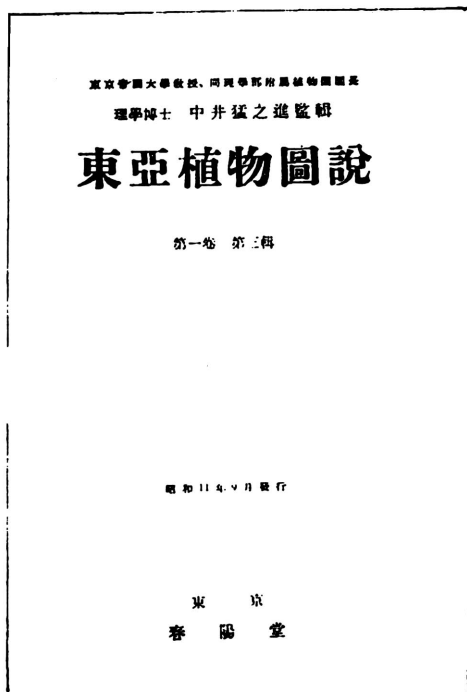
採集地は「相模鵠沼ノ砂地」とあるだけで詳しい地番の説明はない。ラテン語で「本種のタイプ標本は1936年5月12日、服部静夫氏が鵠沼で採集したもので、東京帝国大学に保存されている」と書いてあるから、発見の翌年にも服部博士は研究用の標本を送られたものと思われる。それがタイプ標本になっている。

高さは40-50cmで、茎は直立し、葉は茎の中ほどに4、5枚互生するという。「花ハ五月頃茎頂ニ総状ヲナシソノ数15個内外、純白ナリ」と服部博士がみた清楚な感じを「純白ナリ」と表現している。「花被片ハ並立シテ平開セズ」とあるように、花は咲くというより、わずかにほころびるという程度だという。

近縁種にキンラン(金蘭)、ギンラン(銀蘭)があるが、キンランは花の色が黄色なので容易に区別できる。ギンランは白色であるが「丈低ク」(20cmほど)、クゲヌマランの半分の高さである。ラン科の特徴である唇弁が、「距ヲ為サズ」というところも、キンラン、ギンランと違うクゲヌマランの特徴である。

ハマカキラン(浜柿蘭)と混生していたようで、これも松林の砂地にみられる普通種だった。ハマカキランもタイプ標本は鵠沼になっている(注3)。

【以下6ページへ続く】



『東亜植物図説』(浅井康宏氏提供)



MAEKAWA et KANOGAWA del.

第 XXVI 圖

く げ め ま ら ん

(ら ん 科)

高サ 40-50 cm. 根ハ線形ニシテ細毛ヲ布ク。莖ハ直立シ、稜角アリ、上部ニノミ微突起ヲ布キ下部ハ平滑ニシテ、鞘狀葉三四アリ。葉ハ莖ノ中邊ニ互生スルコト四五、斜上開出シ長サ 4.4-7.2 cm. 幅 1.2-2.7 cm. ニシテ長橢圓形或ハ長橢圓狀披針形ヲナシ、先端ハ銳形或ハ銳尖形、波縁ニシテ濃綠色ヲ呈シ、形質きんらんニ似タリ。苞ハ最下ノモノミ大ニシテ子房ト同長或ハ更ニ長ク、ソノ他ハ極メテ小サク三角狀鑷形ヲ呈シテ尖ル。花ハ五月頃莖頂ニ總狀ヲナシソノ數 15 個内外、純白ナリ。子房ハ圓筒狀長サ 8-15 mm. 花被片ハ並立シテ平開セズ。背萼片ハ長橢圓形長サ 10-14 mm. 銳頭、側萼片ハ往々倒卵狀ヲ帶ビ銳尖頭、背面中肋隆起ス。花瓣ハ萼片ヨリ短カク長サ 8-10 mm. 廣橢圓形鈍頭基脚ハ漸尖ス。唇瓣ハ長サ 6.5-7 mm ニシテ更ニ短カク、概形橢圓狀ニシテ幅 4-4.5 mm. ナレド、横グレバ 8-9 mm. ヲ算ス。中部ニテ三深裂シ、側裂片ハ立チテ蕊柱ヲ兩側ヨリ抱キ三角形ニシテ鈍頭ニ近シ。唇瓣基部ハ内面深ク陷入シ中肋上ハ膜狀ニ隆起シ、ソノ基脚ハ黃色ヲ呈ス。而シテ外面ニハ鈍頭ヲナシテ凸出スレドモ距ヲ爲サズ。中裂片ハ腎形、先端外反シ、不明ニ三裂シ、中央内面ニハ三縱畝アリテソノ前方及ビ縱畝間ニハ黃紅色ノ毛茸密生ス。蕊柱ハ半圓柱ニシテ腹面ハ扁平、長サ 5.5-6 mm. 先端ハ銳尖頭ニシテソノ先ニ卵圓形ノ葯ヲ着ク。ソノ位置ハ柱頭ヨリ高シ。柱頭ハ蕊柱頭部ノ腹面ニアリ不規則ナル突起ヲ有ス。

相模鵠沼ノ砂地ニハまかきらんト混ジテ生ズ。服部靜夫氏ノ發見ニカ、ルヲ以テソノ名ヲ種名トセリ。本種ハえぞきんらん及きんらんニ近縁ナレドモ、前者ニテハ根ニハ毛無ク、且ツ唇瓣ハ花瓣ヨリ長キヲ以テ區別スベク、又後者ニアツテハ丈低ク、葉質薄ク且ツ扁平、唇瓣ハ後端ニ顯著ナル鈎狀ノ距ヲ具フルヲ以テ又明瞭ナリ。

【圖解】 a. 全植物 (×1). b. 花序 (×1). c. 花 (側面) (×3). d. 花ノ縱斷面 (×5). e. 背萼片 (×5). f. 側萼片 (×5). 附圖ハ縁邊ノ粒狀突起ヲ呈ス (擴大). g. 側花瓣 (×5). h. 唇瓣 (腹面) (×5). i. 唇瓣ヲ開キテ内部ヲ示ス (×8). j. 蕊柱 (背面) (×8). k. 蕊柱 (側面) (×8). l. 蕊柱 (腹面) (×8)

(前 川 文 夫)

Tabula XXVI.

Cephalanthera Shizuoi F. MAEKAWA

(Orchidaceæ)

Cephalanthera Shizuoi F. MAEKAWA, sp. nov.

Hæc species valde affinis cum *C. elegans* et *C. erecta*, sed a priori radicibus hirtellis, labello petalis brevior, a posteriori elatior foliis cum *C. falcato* persimilibus, labello basi obtuso-angulato nunquam calcarato bene distinguenda.

Erecta 40–50 cm. alta. Radices filiformes brunnei hirtelli 1–1.5 mm. lati. Caulis angulatus 2–2.5 mm. latus glaber sed superne laxissime papillosus basi foliis vaginato-cataphyllatis 3–4 obtectus, medio 4–5-foliatus. Folia sessilia falcato-patentia 4.4–7.2 cm. longa 1.2–1.7 cm. lata oblonga vel oblongo-lanceolata acutata vel acuminata basi caulem plicato-amplexentia margine undulata viridissima glaberrima facie iis *Cephalantheræ falcatæ* persimilia. Bractæ infima foliacea ovario æquilonga vel valde superans, ceteræ minimæ 1–5 mm. (raro 6 mm.) longæ triangulato-cuspidatæ virides. Flores spicato-racemosi 7–17, ovario cylindrico 8–15 mm. longo viridulo. Perianthia conniventia erecta 10–14 mm. longa alba. Sepalum dorsale oblongum 10–14 mm. longum acutum, lateralia oblonga vel obovato-oblonga breviter acuminata extus medio dorsale carinata margine papillosa. Petala erecta sepalo distincte breviora 8–10 mm. longa elliptica obtusa basi late angustata. Labellum 6.5–7 mm. longum erectum ambitu oblongo-ellipticum 4–4.5 mm. latum utrinque obtusum, explanato 8–9 mm. latum, medio trilobatum, lobis lateralibus erectis columnam utrinque amplexentibus triangularibus obtusiusculis, limbo intus late excavato medio lamellato-costato basi flavo-colorato, extus oblique obtuso producto sed ecalcarato, lobo mediano ambitu reniforme apice subacuto recurvato obscuriter subtrilobato, medio distincte 3-lamellato, prope apicem cum pilis flavo-rubrescentibus in area lineare atque deltoideâ dense papilloso. Columna recta hemi-teres 5.5–6 mm. longa glaberrima dorso cylindrica sed ventrale perfecte planata, apice antherifera. Anthera ovoideo-globosa dilute flavida. Stigma subtetragonale irregulariter lamellato-verruculosum. Clinandrium cuspidatum quam stigma elatius.

Nom. Jap. *Kugenuma-ran* (nom. nov.)

Hab. Hondo, prov. Sagami: Kugenuma (SHIZUO HATTORI, Maio 12, 1936—Typus in Herb. Univ. Imp. Tokyo.)

Explicatio tabulæ. a. Tota planta (×1). b. Inflorescentia (×1). c. Flos laterali visum (×3). d. Flos longitudine dissectus (×5). e. Sepalum dorsale (×5). f. Sepalum laterale (×5). g. Petalum (×5). h. Labellum, ventrali visum (×5). i. Idem, deplanatum (×3). j. Columna, dorsali visa (×8). k. Eadem, laterali visa (×8). l. Eadem, ventrali visa (×8).

(FUMIO MAEKAWA)

塩沢氏による 48 年目の再発見

「もはや戦後ではない」と謳われた高度成長の波は、戦前から鵜沼にあった大邸宅や別荘地を分譲に追い込み、松林や砂丘を宅地化していった。貴重な植物群の自生地は次々と失われ、クゲヌマランの姿もみられなくなった。

すでに昭和 33 年（1958 年）の神奈川県博物館協会編『神奈川県植物誌』にはクゲヌマランの項に「海岸砂地に稀。本種の type locality は鵜沼であるが、現在はほとんど見当らない」と記されている。そしてついに同 50 年には神奈川県立博物館の調査で「藤沢、茅ヶ崎市などの松林で見られたクゲヌマランが三年前を最後に絶滅した」（注 4）と報じられるまでになった。

塩沢氏はそのころ「鵜沼」の名をもったランがあることを聞き、どんな花なのだろうかと古老に尋ねたが「みたことはない」との答えだったという。「それでは自分で調べてみよう」といろいろ文献にも当たってみたが、手掛かりがなかった。そんなとき同 56 年 3 月、「藤沢の自然と植物」と題する諏訪松男氏（当時高谷小学校校長）の講演があった。そのなかでクゲヌマランについての言及もあった。ここで再びクゲヌマランに興味をいだき、5 月初旬、諏訪氏をリーダーとして鵜沼・辻堂の大きな屋敷内の調査を行い、また引地川周辺なども探索したが「幻の花」であったという。塩沢氏はその後も探しつづけた。

昭和 58 年（1983 年）当時、県議だった番場定孝会員は統一地方選のパンフレットのなかで「かつては白砂青松を誇った湘南海岸、そこには数多くの原生植物が見られました。なかでも生息地鵜沼の名を冠した“クゲヌマラン”という野生ランは 10 数年前に絶滅。湘南の秋の味覚といわれた「松露^{しやうろ}」の姿も最早ありま



クゲヌマランの群生地（1983 年 5 月、故塩沢務氏撮影）

せん」と鵜沼の自然が失われていくことを訴え、いまこそ環境保護の急務であることを力説された。

この詩情豊かな、異色ともいえる選挙パンフは、そこに添えられた可憐なクゲヌマランの絵とともに、多くの鵜沼人の注目を集めた。「毎年うちに似たような花が咲いている」と早速、反響があった。48年目のクゲヌマラン群生地再発見であった。植生の保護のため、いまでも場所は伏せられている。

塩沢氏は東大総合研究資料館（現東大総合研究博物館）大場秀章教授のところに持ち込んで同定を依頼した。そして同年5月13日付で「この植物はクゲヌマラン（ラン科） *Cephalanthera shizuoi* F. MAEKAWA と一致することが判りましたので、お知らせいたします」とのお墨付きをもらった。

シーボルト・コレクションのラン

平成14年12月から翌年1月にかけて東京・小田急美術館で「シーボルト・コレクション 日本植物図譜展」が開かれた。シーボルトが長崎に滞在中（1823—1829）、日本の絵師たちに描かせた植物図譜287点が展示されていた。そのなかに「キンラン」と題された1点が含まれていた＝右図（注5）。

全体の感じはクゲヌマランによく似ているが、花色が黄みをおびていること、唇弁が開いていること、花数が少ないことなどからキンランと分かる。日時、産地は記されていない。

キンラン、ギンランはクゲヌマランと近縁の同属（*Cephalanthera* 属）で、この2種のランは江戸時代から知られていたようだ。



『日本植物誌年表』（2002 年）の著者、磯野直秀慶応大学名誉教授によると、ギンランは『和漢三才図会』（1713 年）に「銀蘭」としてその図が出ているというから、少なくとも 18 世紀の初めには好事家に周知のものだったと思われる。

キンラン、ギンランを学術的に初めて記載したのは 1775 年に来日したスウェーデンの植物学者ツェンベルクの『日本植物誌』（1784 年）らしく、前川『原色日本のラン』では、キンラン、ギンランの項に原記載者をツェンベルクとして、彼が命名した種小名の由来を紹介している。

また前川博士は同書で、明治以降になっても「ササバギンラン」「疑問符付きのギンラン」のなかに「クゲヌマランが混じっているように思われる」と述べている。日蘭修交 400 年を記念して、シーボルト・コレクションの一部が、さきごろ東大総合研究博物館に寄贈されたが（注 6）、オランダにある膨大なコレクションのなかに、キンラン、ギンランに紛れ込んで、クゲヌマランの標本も眠っていないだろうかと、夢みたいなことを考えている。（いとう さとし）

（注1） 塩沢務「クゲヌマラン（続）」（昭和 60 年、藤沢市総合市民図書館『わが住む里』36 号）による。服部博士が昭和 7 年—10 年の間、いつごろ鵜沼下岡に移ったかは不明である。博士は 13 年に東大に復職し、6 年間の鵜沼生活を終えた。その後 19 年教授、30 年理学部長、また日本植物学会会長などを歴任、37 年岡山大学学長となった。45 年 69 歳で死去。

（注2） 前川『原色日本のラン』（昭和 49 年、誠文堂新光社）では、クゲヌマランは「鵜沼から採集したものを昭和 31 年 4 月 30 日に描いた。なお果実は鈴木吉五郎氏が栽培したもので、同年 9 月 25 日に描いた」と書いてある。また「現在では、土地開発で松林はほとんど伐られて、ハマカキランとともに貴重な type locality の植生が失われたのは残念である」と記している。

（注3） 浅井康宏「浜柿蘭の思い出」（1990 年、横浜植物会年報）によると、同会のメンバーで横浜正金銀行の佐伯立四郎氏が鵜沼で発見、同氏の標本をもとに牧野富太郎博士が昭和 6 年（1931 年）に新種（*Epipactis Sayekiana* Makino）として記載したという。種小名に佐伯氏の名が採られている。

（注4） 毎日新聞（昭和 50 年 1 月 22 日付湘南版）。

（注5） 『シーボルト・コレクション 日本植物図譜展』（2002 年）カタログ。

（注6） 注 5 もその一部だが、大場秀章『シーボルト日本植物コレクション』（2000 年）および『シーボルトの 21 世紀』（2003 年）にも一部が紹介されている。

鵠沼海岸の桜貝

松岡 喬（会員）

眼にあてて海が透くなり桜貝 松本たかし

「鵠沼を語る会」の会誌「鵠沼」の表紙には創刊当時から「はまゆうと桜貝と海光るわが故里」という一節が書かれています。桜貝が鵠沼のシンボルとされているようです。ところでこの桜貝について「昔はたくさんあったのに、近頃はめったに見かけない」という話がよく聞かれます。「鵠沼」の表紙についても「ないようなものをいつまでも載せておくな」というお叱りめいたものを承ったこともあります。一方では少数意見ながら「まだたまに落ちている」という話も聞きました。

江の島にむれつつ人や桜貝 機夕

病気の回復期で静養中、ということになっている私は安楽椅子でだらだらと日を送っていましたが、ある日、下の息子に「おやじ、そんなことしてたらどんどん足腰が弱るで、散歩でもしてみたらどや」と言われ「確かに足元がふらつくことがあるぞ」と思い当たったでした。この倅も若い頃は一人前にぐれて母親に心配をかけたものだが、ついにおやじに説教するようになったかと、妙に感心もしたので「言うことを聞いてやろう」ということで散歩をはじめました。毎朝6時頃から鵠沼海岸から辻堂浜見山まで4キロくらいのコースです。

散歩をはじめて1月目くらいのある朝、海岸にかなり沢山の桜貝が散らばっているのに遭遇しました。子供の頃から「拾い物」が好きな私は（といっても金目の物を拾ったことはありません）さっそく拾い集めました。数えてはいませんが多分100枚以上はあったと思います。ところが次の日に行ってみるとほとんど取れません。

結局4ヶ月ほどで4,5回「大漁」の日があり、あとはほとんど見かけません。多く拾えた日というのは何か法則性があるのか、などと考えて新聞の「きょうのこよみ」などを見ますが、そんなものが発見できるわけもなく、ただ拾えた日に大潮と小潮の日がない、というのは多分偶然でしょうが「大潮の日には漂着物が多いのかな」と漠然と考えていたのでやや意外な感じがしました。

桜貝二枚の羽を会わせけり 阿波野青畝

ところで私が拾った桜貝を人に見せるとよく言われるのが「二枚貝が多いですね、昔拾えたのはほとんど全部片貝だった」ということです。実際沢山拾える日は圧倒的に二枚くつついたものが多く、まあ3枚に2枚はそれです。これはどういうことでしょうか。一つ考えられるのは桜貝の卑体と呼ばれる蝶番は力が弱く、遊んでいる子供が海岸で見つける頃には片貝になってしまっているからでしょうか。また貝殻のほとんど全部（二枚貝の場合には片側のみ）に2ミリ程度のまん丸な穴があいています。これは「つめた貝」という茶色の巻貝に殻を溶かされて中身を食われているということで、可憐に見える桜貝も楽ではなさそうです。

砂も亦美しきかな桜貝 虚子

サクラガイは学名 *Nitidotellina nitidura* はまぐり目ニッコウガイ科の二枚貝とあります。以下事典から引用してみます。

殻の長さ 3cm, 高さ 1.8cm, 幅 0.6cmで、横長の楕円形。扁平で薄く、前方はまるく、後方は多少切ったようになる。半透明で光沢があり、淡桃色から桃赤色で後端部は多少濃く、殻頂から後下方へ2本の淡色帯がでる。ときに白色の個体もある。殻頂は多少後方に寄って低く、その後に黒褐色の両殻を結ぶ卑帯がある。北海道南部から九州、朝鮮半島、中国沿岸に広く分布し、潮間帯より水深20mくらいまでの細砂底にすむ。殻を浅く砂中に埋め、後端から白い長い2本の水管を出し、入水管では砂上をなでて品をとり、出水管は水中に立てている。砂浜によく打ち上げられ、殻が美しいので採取され、貝細工などに使われ、また詩歌文学の題材ともなっている。俳諧では花貝、紅貝といい春の季語である。

まず色についてですが白色から桃赤色となっていますが、少数ですがオレンジ色としか表現できないようなものもあります。また2本の淡色帯というのは桜貝の特徴であるらしくどの個体もはっきり見ることができます。時々桜貝の兄貴分のような同色系ながら長さが5cmくらいの貝殻が拾えます。これは多分同じニッコウガイ科のヒラザクラという貝ではないかと思いますが、これにはその淡色帯というものはありません。

遠浅の水清ければ桜貝 上田五千石

桜貝が春の季語である、ということは前に触れましたが、その色と形から（桜貝→桜→春）というふうにまあ当たり前に連想されるように思われます。ところが実は貝類の季語は潮干狩りシーズンというか、人が浜辺に出始めるシーズンというか圧倒的に春が多いのです。

和歌の素材としての桜貝は西行や藤原定家によって見出されて広まったといわれています。新古今集以降ということになりますが、和歌の世界が対照をより小さい物に広げていった時期、優雅や繊細が和歌の重要な要素となっていた時期と重なり、この小さな貝もやっと脚光を浴びたというところでしょうか。

ひく波の跡美しや桜貝 松本たかし

文頭に述べました「鵠沼海岸に桜貝があるのかどうか」という問いの答えは「ない日がほとんどで、たまに行っても拾える可能性は低いですが、落ちている日はかなり多量に拾えることがあります」ということのようにです。まあ桜貝を求めて波打ち際を散策するなどというのも乙なものではないでしょうか。私の拾った桜貝はカクテルグラスなどに入れて鑑賞していますが、はっきり言って必要以上にたまっています。それでも海辺を散歩していてひとつでも落ちていると、腰をかがめて拾ってしまいます。これはもはや風流とは言えません。

どろすなに半ば埋もれて桜貝 桜貝娘をつれて海に来る

（まつおか たかし）

明るくも片瀬の山の若葉をば その末に置く浜の松原

寛

大正九年十二月九日 東屋にて

与謝野晶子(左端)・北原白秋

(左二人目)・与謝野寛(右端)ら

昭和十四年三月

(鵠沼ホテルにて)

三月や墨紫の松原の 十四五町のよひやみのいろ

冬柏 昭和十四年三月

昭和十四年三月

(鵠沼海岸にて)

鵠沼のうぐいすの声御寺なる 鐘の響もたづさへて啼く 冬柏 昭和十四年三月

鵠沼はひろく豊かに松林 伏し春の海下にとどろく ”

春の夜の星より高くさしかはす 松の枝がちの浜の宿かな ”

鵠沼の花もあらざる満目の 松の間にうぐいすの啼く ”

昭和十六年十二月

(病床にて)

鵠沼の松の敷波ながめつつ 我は師走の鶯を聞く 冬柏 昭和十七年一月

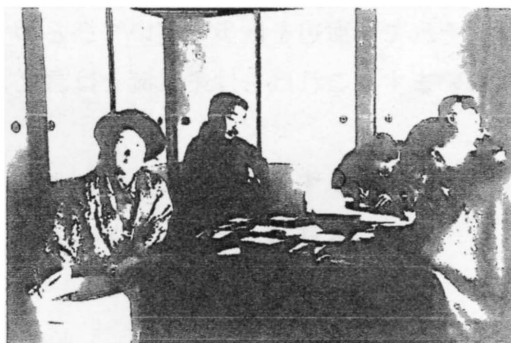
この歌でみる限り戦前(昭和十六年頃)の鵠沼には、こんな光景が思い浮かぶ。松そして松林に埋もれた松原越しに望む海原の鷹揚な波のうねり、淡い紺青の海と純白の波の美しい

対比、春ともなれば鶯の啼き声が松の間を尾を曳くようにのどかに聞こえる。あちこちの沼で蛙のさわぎたてるのも春の風物詩だった。

沼は埋められ松は伐られ宅地造成は進み、鶯の好んで棲むのどかな自然が失われていく現在、私はこれら晶子の歌を通して幻となってしまった鵠沼を心に描くのである。そして古きよき時代の鵠沼を偲ぶよすがを遺してくれた晶子の歌に感謝している。

鵠沼を甦らせてくれる晶子の歌を何時までも、大事にしていかなければと思うこと切である。

(なかやま せいひん)



写真提供・森 藤子氏

与謝野晶子の鵲沼の歌

中山成彬（鵠沼藤が谷在住）

歌人としての与謝野晶子が生涯詠んだ歌は、四万首とも五万首とも云われている。歌集、結社誌、歌誌、雑誌、各種新聞等々に掲載された以外に、歌会、旅先での即興の歌など数知れない活字にならない未発表の歌があるからだ。

ここでは大正九年三月から、脳溢血で倒れ、病臥中の昭和十六年十一月まで、鵲沼を詠んだ歌十六首を拾ってみた。

大正九年三月

(鵠沼東家にて)

鰯沼の松の間に来てあそぶ
波かと思ゆる春の雪かな
歌集 太陽と薔薇

大正九年十二月

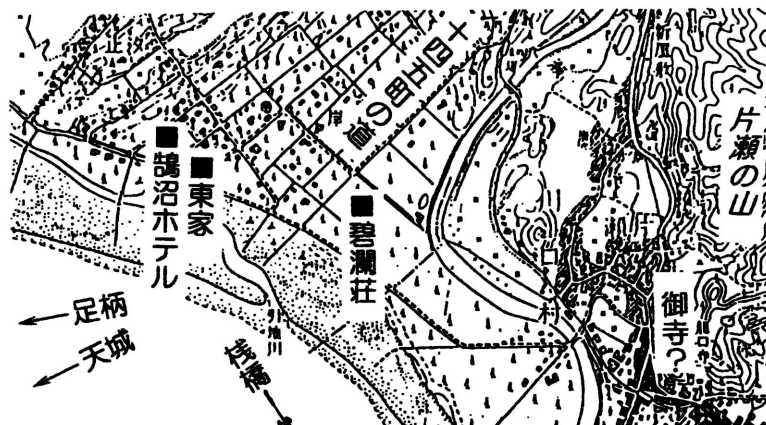
(鵠沼東家にて)

唯ひとり遠くはるかに見てさむし 海を歩める棧橋の脚 歌集 太陽と薔薇
人間の踏みたるよりも快し 砂にのこれる鳥の足あと 寛

昭和五年四月

(鵠沼 碧瀾莊にて)

鵜沼の碧瀾莊をおとずれて　松とある日の春の夕かぜ　冬柏　昭和五年五月
たそがれの露台に立てば悲しくも　海より深き松原の見ゆ　〃
鵜沼のゆふべの蛙にはかにも　胸にさわぐと告げわたるかな　〃
その裏に金絲の刺繡ヌヒのあるごとし　海の浅葱の寛袍の袖　〃
松原の上なる磯の莊に来ぬ　立ちての居ても見ゆる白浪　寛



福永陽一郎と

藤沢市民オペラ

【下】

渡部 瞭(会員)



藤沢音楽事情

藤沢市民オペラ『椿姫』(1988)

「音楽の三要素とはメロディー(旋律)・リズム(拍子、律動)・ハーモニー(和音、和声)である」ということは、義務教育段階でしっかり叩き込まれる。しかしこれは、西洋音楽から出発した楽理であって、日本を含む東アジアの伝統音楽には、ハーモニーという要素は薄い。日本の南に展開する太平洋諸島の人々の歌声には、素晴らしい合唱が聴かれるが、この影響はせいぜい台湾の山地民族までしか届いていなかった。そういうわけで、日本音楽にハーモニーという要素が広く普及したのは、幕末の開国後ということになる。それは、開港場にやってきた宣教師によってもたらされた。彼らは布教活動より先に医療などの奉仕活動から日本人との接触を試みた。こうした活動の第一人者は、^{ジェイムズ カーティス ヘバーン}James Curtis HEPBURN (1815-1911)である。この姓は、現在ヘプバーンと読まれることが多いが、当時はヘボンと呼ばれた。もともと眼科医だった彼は、当初神奈川宿の寺院に診療所を開き、1862年に現在の山下町に移って、診療のほか『和英語林集成』の出版、〈ヘボン式ローマ字〉の考案、第一長老教会の設立などに努め、一方、夫人は英学塾を開いた。これが後にフェリス女学院や明治学院大学に発展する。

横浜では仏和学校(1866)、フェリス女学院(1870)、共立学園(1871)が開校し、続いて1875年に美会神学校(後に東京に移り東京英和学校→青山学院)、1880年代に入ると成美学園(1880)、^{やうしん}搜真女学校(1886)と、プロテスタント系ミッション=スクールの開校が相次いだ。県立の中等教育機関は、師範学校を別にすると1898(明治30)年の神奈川県中学校(→第一中学校→横浜第一中学校→希望ヶ丘高校)、1901(明治34)年の神奈川県高等女学校(→横浜第一高等女学校→横浜第一女子高校→横浜平沼高校)まで待たなければならなかったから、私立先行である。これは、他の開港場でも同様だった。陽一郎の父=福永盾雄が神戸の関西学院で、母=津義は長崎の活水女学校で学んだということを出していただきたい。

こうしたミッション=スクールでは、チャペルでの礼拝における会衆讃美や聖歌隊の育成といった必要性から、合唱教育が重視されたし、その伴奏には簡単に和音が演奏できる鍵盤楽器が多用された。このようにして、元来の日本音楽になかったハーモニーという要素が導入されたのである。後発の公立中学や女学校での音楽指導者は、先発のミッション=スクール卒業者が少なくなかったであろう。

かくして、港町=ヨコハマは、わが国における合唱音楽の先駆の中心地になっていった。この間の事情および今日に至る神奈川県合唱音楽の発展については、畏友=宗行紀子の著書『ヨコハマ・神奈川合唱事情』(近代文藝社・1995)に詳しい。興味ある方には一読をお薦めする。

さて、湘南地域における中等教育はどうであったか。早くも1872(明治5)年から25年間、小笠原東陽による《耕余塾》が羽鳥村に開かれ、多くの有用な人材を世に送り出したことが知られるが、音楽教育はなされていない。

1903(明治36)年に逗子開成中学校、翌年に鎌倉女学校(→鎌倉女学院)が開校した。この両校の関係で有名なエピソードがある。1910(明治43)年1月に起きた逗子開成中学校のボート遭難事故を悼み、鎌倉女学校の数学教師=三角錫子が一晩で書き上げた『七里ヶ浜の哀歌』を、Jeremy INGALLS (米)編の讃美歌*のメロディーに乗せて、遭難者合同慰霊祭の際、女生徒たちとともに合唱したというものである。

※さらにその原曲は『立小便』という英国の民俗舞曲とか。

大正にはいると、1916(大正5)年に藤嶺中学校(→藤沢中学校→藤嶺学園藤沢中高校)が開校し、1922(大正11)年には鎌倉中学校(→鎌倉学園中高校)ができるが、いずれも仏教系の男子校で、しっかりした合唱教育が行われたか疑わしい。公立学校は、1921(大正10)年の県立湘南中学校(→湘南高校)と県立平塚高等女学校(→平塚江南高校)開校を待たねばならなかった。明治後半から大正一桁までは、藤沢あたりの少年少女は、汽車で横浜の中学校や女学校に通学していたのだ。

横浜においては、戦前から継続する音楽団体がいくつも存在するが、藤沢市における一般市民の音楽活動が活発化するのには、戦後になってのことである。それは先ず、合唱からスタートしたといえよう。筆者の記憶するところでは、《さより会》というグループがあった。これは塚本智子が指導する混声合唱団で、後に《湘南市民コール》の主要メンバーになったらしい。続いて横浜第一高女(平沼)出身者が中心になって1950(昭和25)年に結成された女声合唱団《湘南コール(→コール=グリーン)》が現在も活発に活動している。そして1952(昭和27)年、湘南・藤沢両高校合唱部卒業生が混声合唱団《湘南市民コール》を結成する。

藤沢時代 陽ちゃんと峻ちゃんの出会い

1959年のある春の朝、陽一郎は、東京の仕事先に向かうべく、藤沢駅で上り電車を待っていた。折からの地方選挙で、駅前広場では選挙カーが入れ替わり立ち替わり街頭演説の騒音を撒き散らしている。陽一郎の耳に若々しい候補者の声が届き、「文化センターを！」というその内容に共感を覚えて思わず耳を傾けた。被選挙権を得たばかりの、全国最年少市議会議員候補者＝葉山 峻の演説である。

多趣味な葉山が、選挙公報などにも記す趣味に〈オペラ鑑賞〉がある。めでたく全国最年少の市会議員となった彼は、6月に《二期会》の『フィガロの結婚』を鑑賞し、そのオーケストラが《京都市交響楽団》であることに刺激を受けた。「地方都市のオーケストラでも、こうして一流のオペラに出演できるんだ！ こういうオーケストラを持つ都市が真の文化都市と呼べる」

その夏、湘南高校時代の仲間とキャンプに出かけた彼は、弦楽部やブラスバンド部の出身者に、熱っぽく語りかけた。「おい、藤沢にも市民オーケストラをつくってみないか！」各大学でもそれぞれの音楽団体に所属して活動したメンバーが多かったが、社会人になってからの活動場所が得られた者は少なかった。「やれるかなあ」「やってみようか」話は煮詰まっていた。

葉山は、近所に住んでいた《二期会》のマネージャーに意見を訊いてみた。彼は指揮者の重要性を説いた。「藤沢には《藤原歌劇団》の福永陽一郎がいる」

早速葉山は、湘南高校OBの代表者を伴って片瀬山の福永家を訪問し、誠心誠意市民オーケストラの立ち上げへの協力を要請した。この当時の陽一郎は、本業の《藤原歌劇団》常任指揮者の仕事の他に、NHKのイタリア＝オペラに日本側指揮者として初めて参加し、楽譜集『グリークラブ＝アルバム』を編纂・出版し、《法政大学混声合唱団》と《西南学院グリークラブ》の指揮者を引き受けたばかりだった。断ろうと思えば、いくらでも理由を数え上げることができたはずだ。藤沢に住んで7年目だったが、そこは自分にとって寝に帰るだけの場所に過ぎない。しかし、地元のために一肌脱ぐというのも悪くはない。陽一郎は若き市会議員の熱気に押された。何よりも彼の人格に惚れ込んだ。ほどなく〈峻ちゃん〉〈陽ちゃん〉と互いに呼び合う仲が生まれ、生涯続くことになる。

かくして、夏の終わりには福永陽一郎率いる《藤沢市民交響楽団》が誕生する。生まれたばかりの不揃いな寄せ集めオーケストラは、^{ちちぶのみや}秋父宮記念体育館の会議室や鵠沼公民館を稽古場に練習を重ね、11月22日、J. シュトラウス『皇帝円舞曲』とハイドン『交響曲第94番』で旗揚げ公演をした。まさに〈驚愕〉である。

《藤沢市民交響楽団》が発足した1959(昭和34)年は、2月に鵠沼公民館が落成し、その春《湘南市民コール》が関屋 晋^{しん}という優れた指揮者を迎え、《辻堂 かつこうコーラス》が磯部 倅^{とし}を指揮者に迎えて《クール=クロア》として再スタートした年でもあった。様々な意味で、藤沢の市民音楽活動の一つのエポックといえよう。鵠沼公民館は、まだできたばかりの施設だったが、鵠沼海岸駅からほど近く、商店街に隣接するという地の利から、多くのサークルが利用していた。音楽団体としては、磯部 倅率いる女声合唱団《湘南コール》が先輩格であり、こうした音楽団体は、お互いの演奏会に賛助出演するなどして交流を深めながら切磋琢磨し合っただのである。

《藤沢市民交響楽団》発足を待っていたかのように『第1回藤沢市民音楽祭』が開催された。すなわち、11月22日の鵠沼公民館での旗揚げ公演の翌日11月23日に、秩父宮記念体育館に会場を移し、前日と同じ曲目を引っさげて参加したのである。そしてここに福永陽一郎というオーケストラ指導者と磯部 倅・関屋 晋という合唱指導者の指導を受ける団体が一堂に会するという、一地方都市の市民音楽祭としてはなんと贅^{ニエアル}沢な顔合わせが実現した。

この翌年、鵠沼公民館で〈聶耳^{ニエアル}没後25周年記念音楽祭〉を開くこととなり、〈峻ちゃん〉は〈陽ちゃん〉に編曲と指揮を依頼した。もちろん〈陽ちゃん〉は快く引き受けるのだが、これが後にとんでもないハプニングを引き起こす。彼は当時《藤原歌劇団》の全米公演に参加し、この公演は当時米国統治下だった沖縄でも予定されていた。ところが、陽一郎の沖縄入城は米軍に阻止されたのである。「中華人民共和国国歌作曲者に関わる行動」が咎められたに違いない。時代は〈60年安保〉という政治の季節であった。陽一郎自身がこのことにはいかなる感想を持ったかは、どこにも記した形跡がない。葉山は1995年7月16日鵠沼公民館で開かれた『聶耳記念碑建設から藤沢昆明友好提携へ』と題する講演会で、このことの経緯に触れ、「申し訳ないことをしてしまった」と語っている。

さて、鵠沼公民館といい、秩父宮記念体育館といい、音楽公演には全く似つかわしくない〈小屋〉だった。これは演奏団体のみならず、当時活発になりつつあった劇団や舞踊団にしても同様な悩みだった。もっとふさわしい稽古場と公演場所がほしい。これら団体が中心となってネットが組まれ、署名集めや陳情行動がすすめられた。その仲介者として青年市議＝葉山が活躍した。

この間の事情は、藤沢市民オペラ10周年を記念して宮原昭夫を中心に編まれた『カーテンコールをもう一度[藤沢市民オペラ物語]』（藤沢市 1985）に詳しい。

その、待望の〈藤沢市民会館〉がオープンするのは、葉山が「図書館の再建と文化センターの設立」を公約に初当選し、第1回藤沢市民音楽祭が開催されてから9年を経た1968(昭和43)年のことだった。

そしてこの9年間は、陽一郎自身にとっても、人生の大きな転換点だったといえるかも知れない。1964(昭和39)年に《藤原歌劇団》を退団する。この間の事情は、『演奏ひとすじの道』にも余り詳しくは記されていない。その後、1967年に第5回NHKイタリアオペラ公演に日本側指揮者として参加して以来、陽一郎はプロのオペラを振った記録がないのである。

では、陽一郎の音楽生活はヒマになったのかというと、決してそんなことはない。大学合唱団や市民合唱団とのつきあいの幅はさらに広がったし、それらを振って、日本の合唱音楽のスタンダードといわれる多くのレコードの録音を手がけている。それらは後にCD化され、現在でも合唱団の唱法のお手本として活用されている。また、作曲・作詞・編曲も多く手がけているし、音楽誌やパンフレット類への音楽評論家としての執筆、著作活動も盛んに行った。

むしろ、こうした多忙さから、次第に睡眠薬に頼るようになり、薬物中毒の傾向すら現れるに至った。また、自宅を片瀬山から本鵠沼に移したのもこの時期だ。

市民交響楽団や合唱団が心から待望し、設立のために努力してきた〈藤沢市民会館〉がいよいよオープンする。そのこけら落としには、『第九』ほどふさわしい演目はない。9月のオープンを目指して1月から稽古がはじめられた。かくして、独唱者に笠原博子・藤田みどり・宮本 正・平田栄寿を迎え、藤沢市民合同合唱団(湘南市民コールと湘南コールが中心に編成)・藤沢市民交響楽団、指揮：福永陽一郎、合唱指揮：関屋 晋によるベートーヴェン作曲、交響曲 第9番 ニ短調 作品125『合唱付』の歓喜の歌声は、1968年9月28日(土)、新装成った藤沢市民会館大ホールに鳴り響いたのである。

そしてその翌日には、藤沢市民によるミュージカル『詩と音楽でつづる「子供の四季」』が陽一郎の指揮で演じられている。これは、湘南市民コール、湘南コール、山武ハネウェル混声合唱団、善行団地コーラス、辻堂かつこうコーラス、藤沢山岳会コーラス部、鵠沼小学校PTAコーラス、いすゞ自動車コーラス部、藤沢市民交響楽団、湘南マンドリンクラブ、そして劇団蓬生の会の朗読・構成という、文字通り藤沢市民による音楽会だった。

この市民会館オープンの頃から体調をますます崩した陽一郎は、翌年2月の藤沢市民交響楽団第11回定期演奏会でメンデルスゾーンを振った後、3月上旬の演

奏旅行でひいた風邪をこじらせ、熱が下がらないので検査を受けた結果、4月には横浜の国立結核療養所に入院する。病室までは〈峻ちゃん〉が軽々と抱いて運んでくれた。肺結核との診断だった。熱の方はすぐに下がったが、結局9月まで退院の許しは下りなかった。

退院した陽一郎は、10月10日に開かれた第11回藤沢市民音楽祭には現場復帰している。そして翌1970年には『ベートーヴェン生誕200年記念・藤沢市民交響楽団創立10周年記念』と銘打って、5回の『ベートーヴェン=チクルス』を精力的にこなし、〈藤沢市文化功労者〉として表彰を受けた。

1972年春の統一地方選で、葉山 峻が38歳の若さで藤沢市長に初当選した。早速〈市民会館文化担当参与〉という職務を設け、陽一郎を任命する。

陽一郎の方は、自宅を本鵠沼から閑静な鵠沼藤が谷に移した。

藤沢市民会館文化担当参与時代 『藤沢市民オペラ』誕生

〈文化担当参与〉などというと、地元名士の名誉職みたいなものを連想しがちだが、陽一郎の場合は違った。というか、破格だった。

彼自身「私は、長い間、演奏畑一本でやってきた人間で、行政という場所で自分自身に何ができるか、よくわかりませんでした。私も戸惑いましたし、役所の方々も戸惑われたと思います。私は、役所の中の構造とか前例や習慣、ものごとを進める順序などまるで無知でありましたが、その無知を武器にして飛び込んでゆきました。(藤沢市民オペラのおいたち)」と語っている。

先ず、度肝を抜いたのが、市民会館主催の^だ演^{りゃく}し^{しやう}物の^{りやうがく}絢爛豪華さである。その当時、人口30万規模の地方都市が呼べる出演者の常識を遙かに越えた超一流のアーティストを藤沢に招き、それを、市の負担で破格の入場料で提供した。かくして、^{イェムジチ}I MUSICI合奏団、^{スヴィヤトスラフ=リヒテル}Sviatoslav RICHTER(ピアノ)、^{アイザック=スターン}Isaac STERN(ヴァイオリン)、^{エリザベート=シュワルツコップ}Elisabeth SCHWARZKOPF(ソプラノ)、^{せいじ}小澤征爾率いるサンフランシスコ交響楽団、^{マルタ=アルゲリッチ}Martha ARGERICH(ピアノ)、そして^{カウント=ベイシー}Count BASIE、^{パット=ブーン}Pat BOONE といった大御所の公演が打たれ、いずれも黒字興業だったのである。

こうして、一流の芸術を市民に提供することが、この試みの第一のねらいであることに違いないが、陽一郎には、もう一つのもくろみがあった。それは、市民芸術団体のレベル=アップである。「世界の第一線で活躍する“憧れのあの方”が立ったのと同じ舞台に立てる」この喜びと刺激を、市民芸術団体のメンバーに味あわせたい。そのことによって、舞台を大切にしたい。芸術の感性を養い、技術を向上させてほしい。そうした思いがあった。

それだけではなく、一流の芸術家と共演することによって、さらなるレヴェル=アップを図りたい。幸い、陽一郎には《藤原歌劇団》や《東京コラリアーズ》時代に交流した第一線の芸術家たちとの繋がりという財産があった。

これを先ず実現させたのが、1972年クリスマス=イヴという日を選んで公演された藤沢市民交響楽団第20回定期・湘南市民コール創立20周年記念『メサイア』全曲演奏である。《二期会》から瀬山詠子・富樫^{とがし}静子・中村博之・工藤 博というソリストを招き、《松原混声合唱団》が賛助出演している。

「私はやはり、オペラの指揮者、オペラ指揮者だと思う。シンフォニー=オーケストラのコンサートも指揮するし、合唱では、合唱の世界では、その部門での指揮者としてのある程度の練達さを、世間的に承認されているかも知れない。しかし、オペラをやっているとき、オペラに関係したことに〈力〉を出しているとき、どうやら私は、ほかの時と違った活力に満ちているらしいのである。」というのが陽一郎の自覚であった。

オペラは総合芸術である。原作者がおり、脚本家がおり、作曲者があって初めて台本ができあがる。それを舞台に乗せるには、それぞれの役を担うソリストたち、合唱団、ときに舞踏集団や劇団、そしてオーケストラが必要だし、大がかりな舞台装置、大道具・小道具・衣裳・照明といった舞台美術、効果音、マネージメント、それらの人々の世話をする様々な雑用を担当する人々、そして何よりも観客。こうした多くの人々の協力があってオペラは成り立つ。それらを束ねるのが演出家とオペラ指揮者の立場だ。映画などと違ってやり直しはきかない、一回こっきりの舞台だ。これらを全てやり遂げる能力を持っている人ならば、オペラ指揮者は痛快極まりない仕事だろう。

さはあれ、ここにオペラの大好きな市長がおり、オペラに命をかける指揮者がいたとしても、オペラの公演となると、そうは簡単にことは進まない。宮原昭夫はこうまとめる。「市民オペラ実現のための4つの必要条件とは、〈自前の市民ホール〉〈行政の肩入れ〉のほかに〈市民文化活動の下地〉と〈指導的人物〉である。そして、幸い藤沢ではその条件が4つともそろっていた。」陽一郎は、その方式を企画する時、NHKイタリア=オペラにおける手法を参考にした。すなわち、ソリストは超一流のプロを招き、残りは地元で固めるという方式である。

かくして、〈藤沢市民会館開館5周年記念公演〉は〈藤沢市民オペラ第1回公演〉ということになり、演目はモーツァルト『フィガロの結婚』全4幕に決定した。ソリストは、主に《二期会》からフィガロ:立川^{すもと}清登/スザンナ:伊藤京子/ア

ルマヴィーヴァ伯爵：宮本昭太/伯爵夫人：曾我栄子/バシリオ：中村 健/マルチェリーナ：莊 智世恵/ケルビーノ：牧山静江らの^{そらそら}鈴々たる顔ぶれが招かれた。陽一郎の人脈の層の厚さを物語る。地元側は合唱：湘南コール＝グリーン(湘南コールから改称)・日本精工コーラス部・茅ヶ崎高校音楽部/助演：劇団えん・茅ヶ崎高校演劇部が舞台に乗り、オーケストラ＝ピットは藤沢市民交響楽団が固めた。音楽監督：畑中良輔/演出：鈴木敬介、そしてチェンバロ・指揮：福永陽一郎。

…地方都市の市民オペラで、これだけのソリストを揃えることができるのだろうか？ ほとんど前例のない試みを、藤沢はやってのけた。また、このソリストのレベルの高さは、脇を固める地元側に大きな刺激を与えた。「舞台を飾るこの一流歌手たちに恥をかかせるようなことがあってはならない。」この緊張感が練習に熱を加えた。それこそが陽一郎の狙いでもあった。

この市民オペラの成功は、文化都市＝藤沢の存在を天下に高からしめたし、市民の芸術活動のレベルを引き上げた。また、楽器演奏・合唱・演劇・舞踏といった舞台芸術各分野の市民団体の横の繋がりを強化した。そしてなによりも、藤沢市民にオペラという芸術の素晴らしさを、破格の入場料で味わう喜びを得させた。一石何鳥もの効果を藤沢市民にもたらしたのである。

以後、〈藤沢市民オペラ〉は、第2回『セヴィリアの理髪師』(1975)/第3回『こうもり』(1977)/第4回『^{りゅうれんぷ}竜恋譜』(1979)/第5回『夕鶴』(1980)/第6回『カルメン』(1980)/第7回『蝶々夫人』(1982)/第8回『ウィリアム＝テル』(1983)/第9回『ヘンゼルとグレーテル』(1984)/第10回『アイダ』(1985・音楽之友社賞)/第11回『椿姫』(1988)と、ここまでを陽一郎がオーケストラ＝ピットに立った(作曲者である^{だん}團 ^{いくま}伊玖磨が指揮した『夕鶴』を除く)。演目には〈歌舞伎十八番〉の如き名作が並んでいるようであるが、よく見ると、市民オペラならではの冒険が見られる。先ず『^{りゅうれんぷ}竜恋譜』。これは藤沢市民会館10周年を記念して、市民オペラのために原作を公募、それを堂本正樹が脚色し、^{さえくせいげあき}三枝成章が作曲したものである。題材は^{えのしまえんご}『江嶋縁起』にある五頭竜伝説で、この公演が今のところ空前絶後である。次に『ウィリアム＝テル』。これは序曲が余りにも有名で、子どもでも知っていることから、意外に思われるかも知れないが、藤沢でのこの公演が本邦初演なのだ(陽一郎の没後に公演された『リエンツィ・最後の護民官』も本邦初演である)。売り上げ第一のプロには真似しにくい。

第1回藤沢市民オペラ成功の翌年、春には同志社グリークラブの世界合唱祭参加に同行し、渡欧したが、その夏から秋にかけて病気が再発、半年ほど入院して

いる。しかし、この入院で睡眠薬依存症を克服することができた。

退院後直ちに活動を開始し、第2回藤沢市民オペラ『セヴィリアの理髪師』の準備をすると同時に、藤沢市民会館の新しい企画として『日本の音楽家シリーズ』と題する連続演奏会を提案し、最初に〈山田一雄の世界〉をスタートさせた。これは、演奏家自身に演目を企画させるユニークな試みだが、赤字も出た。

50歳を迎えた陽一郎の仕事は、大学の合唱団体、藤沢市の仕事、編曲・著作の3点に絞られてきた感がある。

1977年、《湘南コール＝グリーン》の常任指揮者を磯部 俣から引き継いで、1980年には《藤沢男声合唱団》を設立、常任指揮者となっている。《藤沢市民交響楽団》を含め、これらいわば福永ファミリーは、鵠沼公民館を主な稽古場に、現在も〈藤沢市民オペラ〉の主要な担い手として、また、それぞれの定期演奏会などの公演に活発な活動を続けている。

1981年、福永の指導で育った福永ファミリーや学生合唱団は一堂に会し、『陽ちゃんといっしょ』と題したコンサートを開催した。陽一郎が還暦を迎えた1986年には、新宿厚生年金会館大ホールを会場に開かれた。

こうした地元の音楽文化高揚への貢献は、各方面から高く評価され、1975年市長表彰、1980年神奈川県民功労者、1987年神奈川県文化賞を受賞した。

また、中央での仕事として、1979年に北村協一と共に《日本アカデミー合唱団^{ジャパン}》を主宰し、主に日本人作曲家の合唱曲を多数CDに残している。

1979年には《早稲田大学グリークラブ》、1982年には《法政大学アカデミー合唱団》を率いてヨーロッパ演奏旅行にでかけた。

著述活動では『演奏の時代』（1978紀伊國屋書店）・『私のレコード棚から』（正1983・続1985 音楽之友社）を上梓し、雑誌等への寄稿も多数こなした。

1983年夏、第8回〈藤沢市民オペラ〉『ウィリアム＝テル』本邦初演の準備も追い込みに入った頃、陽一郎は1か月ほど藤沢市民病院に入院する。今度は腎不全というやっかいな病気だった。『ウィリアム＝テル』本邦初演には間に合ったが、以後、人工透析を続けなければならない身体になってしまった。暁子夫人は運転免許を取り、週3回の病院への送迎をすることになる。これにより、行動範囲は大幅に制限されざるを得なくなった。1985年に〈藤沢市民オペラ〉第10回記念公演『アイーダ』という大作が企画されていたからである。幸い『アイーダ』は大成功を収め、音楽之友社賞を受賞した。

陽一郎の遺した文章に次の件がある。^{くだり}「2月は私の〈別れの月〉なのだろうか。」

1946年、音校復学のために、1951年、《藤原歌劇団》入団のために、福岡を後にしたのがいずれも2月だからだ。1990(平成2)年2月10日、〈マエストロ〉よりも〈陽ちゃん〉と呼ばれることを好んだ指揮者は、藤沢市民病院から静かに天国へ旅立った。葬儀は藤沢市斎場で、藤沢バプテスト教会江ヶ崎清臣^{えがさききよみ}牧師の司式で執り行われ、全国各地から多くの方々が弔問に集まった。

陽一郎の没後、文化担当参与は、盟友＝畑中良輔に引き継がれ、藤沢市の芸術文化活動は1992(平成4)年に結成された(財)藤沢市芸術文化振興財団が担うこととなった。その手で開催される〈藤沢オペラコンクール〉は、今やオペラ歌手を目指す声楽家の登竜門に位置づけられ、その優勝者には〈福永賞〉が授与される。

今日でも、合唱団の公演のプログラムに、あるいは合唱曲を録音したCDのジャケットに、〈編曲：福永陽一郎〉の文字を必ずといって良いほど目にする。

コンサート『陽ちゃんといっしょ』は、その後も5年に1度開かれ、この指揮者が多くの若者たちに慕われ続けていることを証明している。

2001年10月14日に開かれた『陽ちゃんといっしょ in 藤沢』では、一人の若い指揮者が藤沢デビューした。誰だろう、陽一郎の孫＝小久保大輔である。彼の振る『フィンランディア』に、福永陽一郎のDNAがしっかり受け継がれていることを感じたのは、筆者一人ではあるまい。

おわりに

2002年秋、われわれ《鵠沼を語る会》は、初めての試みとして市民ギャラリー常設展示室を借りて『華ひらいた鵠沼文化——東屋・劉生・龍之介——』と銘打った展示会を開いた。その題名を検討しているとき、〈鵠沼文化〉とは何かということが話題になった。大正期の鵠沼、ここに華ひらいた東屋を拠点とし、《白樺派》を中心とする文士や画家の文化、そして、藤ヶ谷高瀬邸を拠点とする《大正教養派》と呼ばれる若き学者たちの文化、これらは互いに影響しあいながら、当時の日本文化発展の象徴的存在だったことは間違いない。しかし、それらは地元根づき、地元住民を巻き込んだ文化には発展しなかったように思う。

真の市民文化発展の象徴の一つが〈藤沢市民オペラ〉ではなかろうか。そこでそれを軌道に乗せた立て役者＝福永陽一郎について紹介してみたいと思い立った。当初は10ページもあれば書き尽くすだろうと考えていたが、倍のページ数になってしまった。下書きの段階から、福永暁子夫人には数々の貴重なご意見を頂戴した。深く感謝申しあげる。文中、敬称はすべて省略させていただいた。ご容赦願いたい。

(わたなべ りょう)

再録

鵠沼公民館と私

指揮者 福永陽一郎

すっかり新しく建てかわった現在の鵠沼公民館のいかにも都会的なたたずまいの前に立って、以前のどこかひなびたところのあった旧公民館の様子を想像することは困難だが、私には、目をとじるとすぐにでも、あの前庭や、ロビーのむこうの芝生の庭園や人工池—そこだけが都会臭があった—を思いうかべることが可能である。二十年以上もかよい馴れた、親しみ深いあの建物である。

藤沢に住みはじめの頃、片瀬のほうに家のあった私は、鵠沼公民館は、市民交響楽団が練習所にするまで、行ったことのない場所であった。市民交響楽団は、昭和34年の設立当初、秩父宮体育館の会議室で練習を開始したが、半年も経たないうちに練習会場を鵠沼公民館に移した。団の発足は8月だったが、11月には“鵠沼”で発会式をやっている。以来、20年あまりの長い年月、改築のための1年間をのぞいて、鵠沼公民館は、“市民オケ”の母港であり、基地であり続けた。定期演奏会

をそこでしたこともあるし、芝生のガーデンをつかって「サマー・コンサート」もやったりしたが、何よりも定期的な練習会場として、完全に“鵠公”に依存してきたのである。アマチュアの音楽団体にとって、練習会場の安定確保は何にもまして重要な課題であるが、鵠沼公民館の存在で“藤響”はその問題でわずらわされることが無かった。歴代の館長諸氏をはじめ、館員のみなさんの御理解と好意あるはからいに、深甚なる感謝を申し上げなくてはならない。同じアマチュア音楽団体とはいっても、オーケストラは、楽器や譜面台、大量の楽譜の置き場を必要とし、ただ使用時間帯だけ部屋をかりるというのでは済まない面が多い。地域の文化活動の場としての公民館と、アマチュアとはいえ、常設のオーケストラの“基地”としての拠点とでは、何かと食い違いがあったに違いないのを、寛大で柔軟な処置で当たって下さったのである。その多大な好意の中で市民オケは、ぬくぬくと育ってきたの

である。現在、もし藤沢市民交響楽団が、アマチュア・オーケストラとして、多少とも他に対し誇れる存在となっていれば、それは鵠沼公民館の存在（建物と運用の両面）があったからこそで、それ無しでは考えられない。

（ここで、長い間鵠公の職員でいらした筑紫浪子さんについて感謝の念をもって触れたいところだが、スペースが無い。）

現在、私は、もうひとつの“鵠公”を基地とする音楽団体である湘南コー

ル・グリーンや、新生の藤沢男声合唱団の指揮者として、原則としては一週に3回、“鵠公”を利用させてもらう立場にある。私の藤沢における発表の場は言うまでもなく市民会館であるが、音楽活動の本拠地は鵠沼公民館である。新装成ってさらに良好な“母港”となったこの場所での活動から、私は、藤沢の、あるいは湘南のというに止まらず、全日本へ向けての文化的刺激の波を送り出してゆきたい。

（ふくなが よういちろう）

『鵠沼公民館20年のあゆみ』より



鵠沼公民館ホールにおける藤沢市民交響楽団定期演奏会

僕と福永先生

塚本雅一（藤沢市民交響楽団 前団長）

福永陽一郎という偉大なる指揮者を語ってと依頼されたときは、「はい、いいよ」と二つ返事で受けてしまったが、催促もきたのでいよいよ原稿に向かい、さて書くかと思った時、僕が福永先生のことを簡単に書いていいものかと思った。

僕の福永先生との出会いは、藤沢市民交響楽団（以下藤響）という藤沢のアマチュア・オーケストラ（市民オケ）であり、1972年の僕の入団に遡る。それから福永先生が亡くなられたのが1990年であるから、実質18年。藤響に入団する前、何回か定期演奏会を聞きに行っていたので、一方的に福永先生の後ろ姿を客席から見ていた時代を入れても、せいぜい20年である。

福永先生は、ご存知の通り、プロの指揮者であった。東京音楽学校（現、東京芸大）のピアノ科を中退、藤原歌劇団のピアニストを経て、同歌劇団の常任指揮者、NHK主催のイタリアオペラ来日公演に際しては、日本側の代表指揮者グループに名を連ね、副指揮者（合唱指揮者）として大活躍された。その後は日本合唱指揮者の大重鎮として楽壇に君臨された方である。その氏を知る方は、プロの世界はおろか、アマチュアといえども氏が数々の団体の指揮をされていた手前、その数は計り知れなく、僕なんか足元にも及ばないほど長く、そして深いお付き合いをされ、福永陽一郎って男はこういう人物だと言い切れる方が全国にたくさんいる訳である。そういう方たちから見れば、僕なんか福永先生を語るなんておこがましくて、おこがましくて、簡単に引き受けたことが怖くなってしまった（と言いながらも、もうすでに上述の通り、語り始めているのだが）。

しかし、持ち前の気楽な性格からか、「まっ、いいか」で、僕の視点から、僕の知っている福永先生でいいのではないかと思い直して、再度原稿に向き直った。記憶違いのところもあり、記述の違ったところもあるかも知れないがお許しいただきたい。前述した通り、僕の藤響入団が1972年であり、そこからいよいよ福永先生と言葉を交わす機会が増えていくわけであるが、年代を追いながら思い出を語ることにする。

1972 - 1974 年

なんだ、塚本君来てるんじゃないの

僕が藤響に入団したとき、まだ高校1年生だった。練習場所は今と同じく、小田急・鵜沼海岸駅から近い鵜沼公民館。今は立派な鉄筋コンクリート建てだが、当時は木造2階建て。団員は全部で60人くらいだったのではないだろうか？ 今では120人はいる筈。僕は、ヴァイオリンを弾いていたのだが、練習に行くと、第1ヴァイオリンが一人も来ていないなんてことがざらにあり、そういうときに練習に入っていくと、一人弾きになって大恥をかくのであった。だからして、ロビーでヴァイオリンの仲間が来るまで待ったものであった。そうすると、福永先生の歌声がホールから聞こえてくるのである。「ありゃー、ヴァイオリンがないから旋律がなくて、先生が歌ってる。」休憩時間になって、ロビーに先生が現れ、僕を見つけるや否や「なんだ、塚本君来てるんじゃないの。早く楽器出して弾いてよ。僕さっきから歌いどおしなんだから。」

その頃の福永先生は、40代半ばでももちろんお元気。オケの練習が終わると、主要メンバーと一緒に一杯飲みに行かれていた。僕の記憶では、先生はそんなに飲まれず、薄い水割りかなんか飲まれていたように記憶している。好んで行かれていたのが、今はあるのだろうか、おそらくないのかも知れないが、藤沢駅南口で現「藤沢OPA」の裏あたりにあった「ステーキハウス・松坂」。その店内では福永先生はどんなステーキを召し上がっていらしたかは、僕にはわからない。だって高校生だから、そんな高級なお店には行けなかったから。でも、福永先生も毎週行かれていたわけではなく、ピザハウスの「GIRAUD(ジロー)」や藤沢市民会館近くのドイツ料理「ウィンナワルド」へもよく行かれていた。

1973年は第1回藤沢市民オペラ『フィガロの結婚』が催された年である。すなわち昨年の『地獄のオルフェ』でちょうど30年が経過したわけである。当時のオペラの練習は、想像を絶するほど大変であった。何しろ人数だってそんなにいないし、オケの技量だって現在から比べれば雲泥の差。オペラ自体の曲は、レコードなどで耳にすることはあっても、その仕組みが理解できない。テンポが速くなったり、遅くなったり、音を長く伸ばしたりと交響曲を演奏するのとは全く勝手が違うのである。オペラに関しては百戦錬磨の福永先生、先生の頭の中では『フィガロの結婚』は、ジャンジャン鳴っているのだけど、オケはちっとも言うこと聞かない。「オペラは何が起こるかわからないの。そんな決まったテンポでいつもやるとは限らないんです。ちゃんと指揮見ててよ。このテンポでやりますって言ったって、本番はどんなテンポになるかわかりませんよ！」と怒られっぱなし

の半年であった。

さて、本番近くなると歌い手の方たちが練習に加わり始める。その頃の市民オペラは、オケと合唱は地元のアマチュアが担当し、歌い手の方たちは二期会からいらっしやった。しかも二期会といっても、もう飛び切りの有名人で、フィガロはバリトンの立川清登さん、スザンナが伊藤京子さん、伯爵夫人は曾我栄子さんという具合で、完全に一線級キャストであった。特に立川清登さんは、歌手であることもさることながら、テレビ番組で司会とかもされていたし、とてもポピュラーな存在だった。その方が目の前にいらして、福永先生が「立川君」とかおっしゃっているのを見て、ミーハーな僕は、「福永先生、スグエー！」と感動することしきりだった。

1975 - 1980 年 こんな時に電話してこないでよ

第2回目の藤沢市民オペラは、1975年に行われたロッシーニの『セヴィリアの理髪師』であった。この時も、立川さんや塚本章子さんらが出演してくださった。しかし、オケは相変わらずで、出なきゃいけないところで躊躇し、音を出してはいけないところで飛び出してしまうという有様であった。

ある本番も近くなった歌合わせの時のこと、団員にとっても優秀な男がいた。湘南高校を卒業して東大にストレートで入学を果たした。彼が、そのリハーサルで出てはいけないところで飛び出した。その瞬間、福永先生の怒号が彼に向けられ、彼にぶつかり公民館のホール全体にこだました。「ばっかーっ！　そういうのをほんとの馬鹿って言うんだーっ！」　おそらく優秀な彼は、生まれてこの方、馬鹿という尊敬語を一度だって耳にしたことはなかったに違いない。彼の姿を藤響で見ることは二度となかった。

この5年間には、大きな出来事があり、その最大のイベントが藤響の現在までの歴史で、後にも先にも1回だけの海外演奏旅行である。団員が仕事の上でその国の駐在員をしていたこともあり、メキシコへ行った。藤響の30年史の中で福永先生はこう書かれている。「大勢の外国人におさえられた聴衆相手に演奏することで、いつもの、聴衆のうちに身内が圧倒的に多い演奏会とは違った緊張と意欲に満ちたコンサートができました。」と。

このころ、僕も藤響に入ってから年数が経ったのと、若手であったこともあり、少しずつオケの役をおおせつかることになった。最初の仕事はプログラム係。この仕事は、その後もずいぶん長くやることになったのだが、要は、本番のときのプログラムを作る仕事である。原稿を依頼し、自分で構成し、印刷屋とやりとり

するという仕事だ。パーカッションに小林さんという方がいらして(今も時々エキストラで出演されているが)、その方は当時小学館に勤められていたので、専門家。その方にこう口説かれた。「ねえ、塚本君、プログラム係やらない？ 毎回、陽ちゃんに原稿頼むから、原稿取りに先生の家遊びに行けるし、レコード一杯もらえるから得するぜ。」「ほんとー！」と言ってすぐに手伝い始めた。こちらは、だいたい本番の2週間ほど前になれば原稿はできているものと勝手に思っているものだから、福永先生に電話すると「えっ、本番までまだ2週間もあるじゃない。あのね、印刷屋なんて3、4日もあれば間に合うんだよ。まあ1週間前になったらもう一回電話してみて』と言われた。そして、1週間前に電話すると原稿はできておらず、単に先生が忘れないように確認してあげるためのコールであったのだ。先生は、そこから初めて原稿に向かうのであった。ある時、印刷屋の社長さんが言った。「藤響さんのプログラム、お届けの日の3、4日前は、僕らは徹夜ですよ」と。こんなこともあった。やはり、原稿が欲しくて催促の電話を入れたときのことである。運良く先生はご自宅にいらっしゃって、暁子夫人が取り次いでくださった。電話の向こうから先生の実に不機嫌な声が聞こえてくる。「ねえ、塚本君。今テレビで誰それ指揮の何たら交響楽団の演奏やってるんだけど、見てないの？」「えっ？ 見てませんけど」「うっそー。信じらんない。こんな時に電話してこないでよ」「……………」

先生は皆さんがご存知の通り、多くの著書を遺されており、当時は『レコード芸術』を始めとする音楽雑誌にも原稿を載せていらして、執筆の面でもご多忙であった。また、多くの合唱団を指導されていたので、当然それらの団体のプログラムにも寄稿されていたに違いない。ほんの時間のできたときにさっと書かれてしまうのだから、締切なんていちいち気にされていなかったのかも知れない。

1980 - 1985 年 皆の心がまた一つになった

この5年間は、藤響にとっても、また僕にとっての福永先生においても、大きな変化が起こった時期であった。それは、1983年秋の、当時日本初演であったロッシーニ作曲の『ウィリアム・テル』上演に際してのことであった。日本初演という大きな山に向かい、大小のトラブルを起こしながらも藤沢市民会館のスタッフを中心として、オケ、合唱団、またそれを支える多くの人々は一丸となっていた。しかし、その夏、福永先生が倒れられたのである。腎不全。確か、10月公演を目前にして福永先生は、一月入院されたはずである。しかし、驚くべきは先生の音楽にかける情熱、この藤沢市民オペラにかける気迫であった。先生が倒れる

や否や、われわれを含む出演者には、あせりが生まれ、動揺が隠せない。あらぬうわさが飛んだり、代役説などかなり全体の足並みが乱れたことを感じたのを憶えている。僕自身の心の中でさえも、この時ほど福永陽一郎先生の存在が大きくなっていることを感じたことはなかった。

約^{ひとつき}一月の闘病生活を終え、退院された先生は、その日から現場に復帰されたのを憶えている。皆の心がまた一つになった。先生が入院される前よりも大きな塊になった。そして、公演は大成功。年末のNHK『音楽ハイライト』でも採りあげられた。この日を境に藤沢市民オペラは、日本全国にその名をとどろかせ、また、市民と行政による本当の市民オペラの集大成に向け、大きく動き出したのであった。

しかし、同時に人工透析を余儀なくさせられた福永先生の健康状態もこの年の夏を境に、大きく変化していった。

指揮をするという、とても激しい運動に先生の体力がついていなくなり、棒さばきにも軽快さが見られない日が多くなった。藤響のスタッフにも、先生に無理をさせるまい、少しでも長く指揮をしていただきたいという先生の健康を心配するあまり、先生のどうしても振りたいという気持ちをセーブさせる動きが見られるようになった。

1986 - 1990 年 *It's My Orchestra!*

1987年、藤響は初の外国人演奏家、確か、元ニューヨークフィル・コンサートマスターのガブリエル・バナット氏と共演する機会があった(その前にベルギー・クラシカル・トリオとベートーヴェンのトリプル・コンチェルトをやったが、この時はそのメンバーの中に志田とみ子さんという日本人ヴァイオリニストがいたので、単独外国人は初めて)。曲目はベートーヴェンのヴァイオリン協奏曲だった。この方は、当時藤響のチェロ弾きでソニーの重役さんだった宮岡さんが、アメリカで知り合い、藤響定期に出演してくださることになったと記憶している。しかし、宮岡さんとしては、相手がバリバリのプロであること、それに比べてこちらはアマチュアで、迷惑を掛けてはいけないという心配心から、あらかじめ藤響はへただということを彼に吹き込んでいたらしい。だから、バナットさんは自分が弾くだけでなく指揮もしてやろうと思ったのではないだろうか。演奏しながらオケと少しずれたりすると、足踏みして拍子を取り始めるわ、英語で注意し始めるわ。怒ったのは指揮者の福永先生。自分という指揮者がありながら、ソリストが仕切り始めるのだから、ついに英語で「*It's My Orchestra!*」とおっしゃっ

た。「えーっ、このオケ、福永先生のもの？」ってかなりの団員がその時思ったはず。創立以来指揮してきた先生は、心底、藤響をそう思われていたのだろう。

われわれは、1989年に創立30周年を迎えた。このころ人工透析を続けられていた先生の体は、不安定な状態が目につくようになってきた。体力もかなり落とされたように伺えた。先生は、その記念コンサートの出し物に、藤響初演のマーラー『交響曲第1番』を選ばれた。しかし、そのころの先生には、どう見てもこの長く激しい曲を振れるだけの体力はないと思えた。オケのスタッフは先生に頭を下げた。「先生、マーラーを振るのを辞めてください。体力が持ちません。お願いです。」これには、かなり先生が抵抗されたのを憶えている。よく指揮者は(指揮者に限らないかも知れないが)舞台上で振りながら死ねれば本望ということを知っていた。でも、まだ若造だった僕には止めることがやさしさのように感じていたのかも知れない。今は、本人がやりたいのなら仕方ないかと思うし、それが一番いいかとも思う。結局、先生はメイン・プロを若い佐々木修氏に譲った。後に語られていたことを憶えている。「舞台の袖で初めて藤響を聞いた。そこには難曲マーラーが流れていた。一瞬わが耳を疑った。」と。

1990年2月10日 なんだ、塚本君、来ていたんじゃない！

この日は土曜日、いつもの通り藤響の練習。もちろん指揮は福永先生。鵜沼公民館へ行くと団長の山田君がそわそわしていた。「塚本さん、先生が倒れはった。市民病院へすぐ行ってくれへんか？」大急ぎで古手のメンバーと病院へ向かった。でも、着いた時にはもう先生は旅立たれていた。

僕と先生はその後、たまたま二人きりになることができた。ご自宅へ先生をお送りする寝台車に僕が付き添うことになったからだ。暗い寝台車の中で隣に先生が眠られている。先生の声が聞こえた気がした。「なんだ、塚本君、来ていたんじゃない！」

先生の自宅に着くと、暁子夫人が「塚本君、急に具合悪くなって病院へ行ったから、2階のワープロ付けっ放しかも知れないの。もしそうだったらスイッチ消してきてくれる？」そう言われて2階の先生の書斎へ入ると、やっぱりワープロは付けっ放しだった。スイッチを切ろうと画面を見た途端、驚きが変わった。画面の中は、この秋に上演予定であったグノー作曲『ファウスト』の構成がびっしりと書き込まれていた。画面を見ながら後から後から流れ出る涙をこらえることはできなかった。

(つかもと まさかず)

菅沼五郎さんの事

矢 田 健 爾（会員）

菅沼さんを知ったのは、上田臥牛さんに勧められて村岡の公民館のデッサン会に通い出してからだ。その頃は今から25年前になるだろうか、藤沢ではまだヌードを描く事が公民館などでははばかれる時代だったのだ。40人くらいの生徒がいて、毎週、日曜日は東京からモデルを呼んで、午後3時間色々なポーズで20分やって10分休みというコースで、一緒に描いていた菅沼さんが一回りして助言するだけで、モデル代は参加者の頭割りだから菅沼さんも払っていた。だから安くて参加者も多く休む事は無かった。彫刻家はデッサンに強い人が多いが、勤勉な事もあるだろう。江の島を描く会を作って月曜日に皆で描きに行っていた。立体感のあるデッサンに感心した事がある。

デッサン会が村岡の公民館から鵠沼公民館に移ってから、年1回年末に助け合いのバザーを開いて、集まったお金は、朝日新聞を通じて中国残留孤児の養父母に贈っていたようだ。恒例の似顔描きで良く私と菅沼さんと並んで描いたものだった。宣伝は手書きのポスターで、何かの裏紙や、ありあわせの模造紙だった。墨で書体は素朴で温かみのあるもので、街が待っているからといって、自分で張るお店に頼んで貼らせてもらっていた。ここでも自分の利益は一切、取らなかった人だ。奥さんは清貧に甘んじていた。大杉・野枝の娘だそうだが、根性は座っていると思った。作品は市民会館の片山哲の像、稲村ガ崎にある逗子開成の悲劇をテーマにした弟を兄貴が庇って励ましている彫刻だ。

鵠沼海岸のニエアル像、このときは実際に昆明まで行って、親族に会ってきた話を後で聞かされた。本人としては、昆明はそんなに気に入っていなかった様だ。一緒に行ったのは榊居祐三氏だと聞いている。

若い時には二紀会に属していたが、彫刻は重いので出品が大変で止めたと奥さんが語った事がある。東京美術学校時代は、喧嘩速く、しかしながら弱かったそう。ラグビー部で活躍し向こう気が強かったのだろう。ただ流石と思ったのは意外と英語が上手で、噂を聞いてモデルに雇って欲しいと、スエーデンから来たモデルを描いた事がある。そのモデルから来た感謝の手紙を私に見せた事がある。返事の写しを見て舌を巻いた。どうも招待の断りの様だった。

毎週一回のデッサン会の他に年2回の夏の陣と冬の陣の1週間かけて毎日勉強

会があった。ここでは菅沼さんは彫刻のグループを熱心に教えていた。芯の木組みから上のつけ方まで素人の方たちに手ほどきをしていた。何十年があつという間に過ぎたから結構上達した方達もいたようだ。その中に桑原玲子さんもいたし、熊谷守一の娘で、樫^{かや}という人も通っていた。

そこからもらったのだろう、占墨^{せんぼく}を頂いた。熊谷守一旧蔵^{きゆうざう}の明墨^{めいぼく}で、「守一も私も一生かかつて使い切れなかった墨だから、君に贈る」といつてくれた。有り難いので、お礼を持っていったが受け取ってもらえない。仕方がないのでその前頃、先生の作品を買わせてもらった時、値切った事を思いだして、あの時値切らなかった事にしてくれと行って、収めてもらった。その買った時の話はこうだ。小田急で、気がついたら隣に五郎さんが乗っていて、これを買ってくれと行って見せたのが黒人の顔のレリーフだ。よっぽど彫刻家は売れないのだと思って頂戴したが、その時、私は胃を手術して、相模原の北里大學病院に通院中だった。

最後までデッサン会には顔を出して、杖を突いて送り迎えつきで裸婦像を墨でデッサンをしていた不屈の姿に感心して、菅沼先生90歳の像を描いた事がある。藤沢のたくら画廊での記念展でテラコッタを買い求めた。この時も安かったが、たくらさんに礼をいわれた。五郎さんが亡くなってから自宅をギャラリーにした奥さんから、テラコッタやブロンズ像の小品をいくつか譲ってもらった。私のアトリエに今でも飾つてあるし、なんとまあ香典返しが、五郎さんの額つきのデッサンだった。これは無造作に玄関に私のコレクションの一つになっている。ずるっと間を持たせた面白みがある。ちゃんとしたデッサンが出来てからデフォルメした面白みだ。そこに最後の時間をかけたのだろうと思っている。不思議な人だと思っていたが、親は銀行家でそんなに稼がなくても良かったのかもしれない。奥さんの挨拶にも不思議な人だったと書いている。

鵜沼^{うね}に無料の美術学校を開いた、藤沢のみならず湘南の美術界にとっては、「基本を重視せよ」という

無言の遺言をくれた
大恩人である。しかしその事に、気がついていない人が多い。
忘れ得ない鵜沼文化人の一人である。



(やだ けんじ)

デッサン会での菅沼五郎氏

画：矢田健爾

彫刻家菅沼五郎先生

桑原玲子（会員・創造美術会彫刻部）

——じわっと暖かさが——

菅沼五郎先生とお知り合いになったのは、今から30年も前のことです。先生が毎年年末になると、鶴沼公民館でチャリティー美術展を開かれたのです。2日か3日間の期間だったそのチャリティー展は、主催はどこであったのか「よく考え」ても思い出せません。実態からいえば、菅沼先生を取り巻く美術家の協賛であったと思います。たまに2～3の絵かきさん風な方がいらした時もありましたし、出品作品から考えてもそうだったと思います。

しかし、会場の販売係はいつも五郎先生と奥さんの幸子さんでした。私はこの展覧会のファンでした。美術品などとは縁遠い暮らしでしたが、チャリティーの値段で手に入れることができてニコニコでした。ボロ家に住んでいましたが、家の中は美術がいっぱいで、楽しく暮らしました。夫も美術が好きになりました。その頃この行事に協力なさって、矢田健爾先生や鶴沼松が岡の版画家大野和子さんが、来場者の注文を受けて似顔絵を描くコーナーで、色紙にむかっておられました。このチャリティー展は、10年近く続いたと思います。集まった寄金は福祉施設にでも……とっておりましたら、「日本の中国残留孤児を育ててくれた中国の育ての親の方々に送っていたんだよ。」とのちのち誰からか聞き、「はっ」としました。そして「五郎先生らしいな……中国の育ての親にだって……。」思い出しても胸がじわっとあつくなります。

——湘南美術研究会——

ずっと以前は、村岡小学校でひらかれていたようですが、ここ20年ぐらいは市民会館を夏と冬5日間ずつ借り切って、絵の人と彫刻の人を合わせて60人の美術愛好家が参加して、プロの裸婦モデルさんを3人依頼して制作をしています。

この会のお知らせは以前は市の広報にも掲載されていました。

今から18年ほど前でした。その頃私は辻堂在住のN先生に彫刻の指導を受けていましたが、少人数では、首とか着衣の座像とかになり、裸婦制作など夢でした。

そんな時、市の広報紙上で湘南美術研究会のお知らせを読み、申し込み先が菅沼先生と知り、すぐ電話で申し込みました。先生は「ああ、あんたか。いらっしゃい。」といて下さいました。

そしてその日の夕刻でした。まだ蒸し暑い中を、ちぢみのシャツと半ズボンで自転車を走らせて、汗びっしょりで我が家の玄関に立ち、「ほら、これを持って来なさい。」と、すぐ制作にかかれるように、板に人体の型に針金をたて、持って来て下さいました。今思い返すと、70歳をいくつか越していらしたと思います。思い出す度に頭が下がるばかりです。研究会では、菅沼先生は参加者の間をうれしように歩いたり、また、必ずご自分でも小品を制作され、それを見学するのも勉強でした。

湘南の美術をする人をたくさん育てて下さいました。

——至福の一日——

ある日、鵠沼海岸駅で菅沼先生にお会いしました。「あんた、あしたね、東京のアトリエに型どり屋が来るんだよ。見に来るかい？」こんなまたとない勉強のチャンスと思って「ハイ伺います」と私。「朝早いよ、大丈夫かい」「大丈夫です」と私。

翌朝は5時15分。鵠沼海岸駅にちょっとだけ先に着いていました。私に先生は「よく起きられたね」と。先生だって眠そうな顔でした。

小田急に乗ったまま、藤沢を過ぎると、先生はカバンをゴソゴソ「ほら朝ごはん」だとのり巻きが並んだのを差し出して、ご自分がポンと口に入れました。私は「パンを食べて来ました」というと「奥さんがね、電車の中で朝ごはん食べるように、いつも作るんだよ。今日はあんたの文も入れてあるとってた」と、またすすめて下さいます。車内はまだパラパラなので、2～3個頂きました。

アトリエのある駅に下りると、先生はスタスタと公衆電話ボックスに向かい、後ろへ廻ると自家用自転車をズズズと引っ張り出してきました。そして私に「後ろに乗りなさい。ここからアトリエまではちょうど具合のいい坂なんだよ。全然ペダルを踏まなくてもアトリエに着くんだ。」と。冗談じゃない、80近い先生の自転車に乗せて貰うわけにはいきません。と、私は後ろの座席にカバンだけ乗せて貰って、スタスタと先生の脇を付けていきました。

日立駅の広場に建立される等身大の裸婦像の鑄造前の石膏型どりは、業者3人

ほどで手際よく進められ、夕刻には終わりました。この日の往き帰りの車中での、こっくりこっくりの合間に話された先生の滋味あふれる言葉は、私の宝物になっています。

——或る夏の日の朝——

外から帰った夫が「いま菅沼先生に会ったらね、昔の先生の作品で、横浜駅西口にあったのを回収して来たので見においでといていた」と。2～3日した早朝、先生宅の前に立ち、「お早うございます」と挨拶の声をかけると「おーおー」といった声でしたが、なかなか出て見えません。「あっ、これだな」なんてシートでぐるぐる巻いてあるのを見ていたら、先生がお勝手口からぼそぼそと出て見えました。ランニングに短パン姿。「あれ！」と思わず声を出してしまいました。膝下のすねが真っ赤なのです。「先生、どうしたんです？」と聞くと、「うん、朝ね、こうやって熱い湯で足をあっためて元気を出すんだよ」と。“先生はこんなにして仕事をしているんだ”

私は、怠惰な日が続くと今でもあの日の先生の姿が浮かびます。

——「可哀相だからだよ」——

前を通ったからと、菅沼先生が我が家に寄って下さいました。そこへ先生とだいぶ懇意らしいS氏が見え、商売のバイクを庭に止めて、お茶のみに加わりました。S氏が遠慮のない口調で「先生、松が岡1丁目の屋敷は広いね。昔から金持ちなんだ？」というのと、「親父がさ、金鵒勲章を貰ってさ、それであそこを買ったんだよ。」間をおかずにS氏から先生にまたぶしつけな質問が飛びました。「先生の奥さんは、大杉栄と伊藤野枝の娘さんなんだったってねえ、どういうことで一緒になったの？」先生は、「可哀相だからだよ」とボキッとおっしゃいました。それは大正12年9月1日、大震災の混乱に乗じて、治安維持のためと称して、大杉夫妻と、たまたま一緒にいた甥の6歳になる橘宗一さんを虐殺した東京憲兵隊長の甘粕大尉への怒りがこもっている声に聞こえました。

奥さんは、先生と一緒に私たちを見守って下さったやさしい方でした。

(くわはら れいこ)

菅沼五郎夫人について

—大杉栄の娘さん—

鈴木 三男吉（会員）

「鵠沼に永く住んでいらした彫刻家菅沼さんの奥さんが先日亡くなりましたが、その方は大杉栄の娘さんだったそうです」と会員の有田氏から聞いたのは、昨年の夏頃だったと思います。

日本の近代思想史のなかで特異な存在として知られているアナキスト大杉栄が、大正10年頃こゝ鵠沼の東屋旅館で里見弴、久米正雄、宇野浩二などとの談笑を楽しみながら自叙伝を執筆したことは一般によく知られています。しかし、その娘が彫刻家菅沼五郎氏の妻として永く鵠沼に住んでいたことは、ほとんど知られていませんでした。そこで会誌『鵠沼』にぜひ記録しておきたいと思い、菅沼五郎氏については、面識のあった矢田、桑原両会員、そして、夫人菅沼幸子さんについては私が担当することになった次第です。

手許にある資料によれば、幸子夫人は大正8年12月、大杉栄と伊藤野枝夫人との間に生まれた次女「エマ」で、生後間もなく大杉栄の三番目の妹松枝の嫁ぎ先牧野田家に養女にもらわれ、そこで幸子と改名されたとなっています。したがって三番目の娘にもまた「エマ」という名前がつけられたそうです。幸子さんのその後については、幸子夫人自身が書かれた文書が残っていますので、関係者のご諒解をえて、ここにそのまま転載することにしました。

伊藤野枝 はるかなる存在のひと

菅沼 幸子

大杉栄・伊藤野枝共著『二人の革命家』（アルス、一九二二年六月）は父が主としてミシェル・バクウニンを、母が主としてエマ・ゴオルドマンを語った本だが、その序に、父はこう書いている。「伊藤も又、女らしく、其の無政府主義を知り始めた十年ばかり前に、先づエマ・ゴオルドマンに私淑し出した。（略）彼女と僕との間に出来た（略）第二の女の子は、其の母親によって、エマと呼ばれた。が、此の子は、生まれると直ぐに、僕の妹の一人に殆ど搔つさらはれて行って、さち子と言ふ飛んでもない名に変へられて了つた」。

その当時、養母（父の三番目の妹・牧野田松枝）は中国の天津に在住、養父と

の間には子がなく、たまたま父達のところに来ていて、そういうことになったらいい。「あんたのママはお産しても、翌日から腹這いになって原稿用紙に向い、赤ん坊が、おむつが濡れようが、夢中になって何か書いていた人だった。いよいよ、あんたを連れて出発する日、東海道線の国府津まで送ってきて、そこで下車し、汽車がゴトンと動いたとたん、あんたのママは、大声をあげて泣き出した」、と養母は話していた。

生後一年目の写真を養母が送ると、あの忙しい母から、白羽二重の生地には鶴と松の模様の日本刺繍を、自分で刺した写真立てが送られてきた。それが長い間、筆笥の上に飾られていたのを覚えている。その後、えんじ色の絹にこまかい梅の花模様の、綿入れの被布と長着が、やはり自分で手縫いして送られてきた。

日本のおいもを「幸ちゃん」に食べさせてやって、という手紙と一緒に、さつま芋がたくさん届き、その手紙も後に見せてもらった。そんな風で、泣きわめく赤ん坊にもかまわず、原稿用紙に向っていた母親も、遠くへ手離れた親心というのか、はるばるとこうしたかたちに、“母の想い”を託していた様子である。

関東大震災直後の、大正十二年九月十六日、父とは母、静岡にいる父の妹あての、一通の手紙をポストに入れて、鶴見へ出掛けた。その手紙には、鶴見で被災した第一家を見舞い、あやめ（父の末妹。病氣療養のためにアメリカから帰国していた）の一人息子、橘宗一も鶴見にいたので、自分たちの家は大丈夫だったから、連れて帰ろう、第一家は着のみ着のままなので、救援してやってほしい、とにかく心配なので、これから二人で出掛ける、などとあった。

父とは母は手紙どおりに、鶴見で第一家の無事を見定め、宗ちゃんを連れて帰る途中、あんなことになってしまった。

あれから五十年目に、この宗ちゃんの父親、橘惣三郎氏の、「犬共二虐殺サル」と、悲嘆を銘した碑が、名古屋の墓地でみつき、ひきつづいて、三人の遺体の解剖鑑定書が陽の目をみることになった。これらは、新聞紙上でも発表され、鑑定書のコピーは私にも送られてきたが、読む気にはなれず、しまったままではいる。

しかし、その夜、初めて肉親としての痛みを感じ、三人のことを想い、涙が溢れて仕方がなかった。なんだか、いつも遠い存在のひとだったのが、俄かに身近く、我が身を削がれるほどの権力への怒りと悲しみが、じかに迫った。

青鞥時代の母は、辻さんという、素晴らしい才能の持主の方にはぐくまれ、苦闘はしたものの、まっしぐらに生きようとした姿勢は、解らないではない気持もする。辻氏との間の二人の兄とも、逢える時代がきて、兄妹として往き来をした。

長兄まことは、辻家の祖母に連れられて、「大杉やの小父さん」の処によく出掛けたと、昔話をした。母を知らない私たちに、ちょっぴり批判を混えたジョークをきかせ、笑いに巻きこむのだった。

「おふくろときたら、シンガーミシンを買って、ハイカラな洋服を縫っては、子供たちに着せるんだ。ピラピラなんかついたのを、むりやり着せられて。なんでも新しがりやで、挑戦するのはいいけれど、子供心にも迷惑だったよ。あの人のことだ、今まで生きていたら、選挙なんか打って出て、おれたちみんな、トラックへ乗せられてるに違いない」。

その兄も、すでに亡く、それより早く姉のマコも逝った。姉は福岡にいて、私は知らせを受けると、すぐ飛んでいった。柩を送る車の中で、初めて姉妹四人が揃ったのだ。現在、二人の妹の一人は短歌の道、ひとりは平和運動に、止むに止まれぬ気持ちを貫いて歩んでいる。

私が両親のことを知ったのは、十五歳の時だった。養母と静岡の叔母（父の二番目の妹・柴田菊）の話しあいで、私は天津の小学校を卒業すると、静岡英和女学校に進み、五年間を静岡で過ごした。その叔母夫婦はアメリカ帰りで、当時としては自由な雰囲気をもっていた。生前の父や母も、この家にはよく出入りしていたという。その家の洋間の本棚には、『大杉栄全集』『伊藤野枝全集』などが並んでいた。（他の親戚も持っていたが、押入れの奥に隠され、私の目にふれる機会は無かった）。

ある日、従妹と、その洋間でおしゃべりをしていた。「話に聞いていた物書きの伯父さんて、この人なのね。何が書いてあるのかねエ」と言いながら、パラパラ頁をめくると、家族の写真の斜め上に、丸く囲まれて、なんと私の写真がある。

おかしい、なんの間違いかと、次の頁を繰ると、系図が出ていた。その中に、長女魔子、次女幸子とあった。もう疑いようのない事実、一瞬は胸を衝かれたが、父も母も、すでに亡き人達のことでもあり、「それはそれで」と心の中に呟いて、そうだったかと納得のようなかたちで、隅っこに押しやった。

それより何より、従姉と信じていたマコが、姉だったことの喜び。妹が二人もいる。今宿には祖父母もいた。そして兄たち二人も現れて嬉しさの方が大きかった。母は二十八歳でこの世からむりやり引き裂かれたものの、とにかく七人の子を産み、その中で日々闘い、獲得し、短い生涯をせいいっぱい生きたひとだったなァと、私にとっては、やはり“はるかなる存在のひと”である。（原文のまま）

以上は『定本伊藤野枝全集』（平成12年、学芸書林）第一巻の月報①に掲載されたものです。この全集の月報には、妹のエマ、ルイもそれぞれ西沢笑子、伊藤ルイとして母伊藤野枝のことを書いています。

先日、鵠沼在住の画家平本公男夫妻のご好意により菅沼家のご長男「緑」（ろく）氏に有田氏と一緒に目にかかり、いろいろお話をうかがうことができました。そして母上（幸子夫人）への追慕録「右の眼で左の眼を見る」（私家版）をいただきましたが、この不思議な書名が、お二人のつくりだす菅沼家の超俗した大きな包容力を物語っているように思えます。五郎氏はよく幸子夫人に「お前は鼻ぺちゃだから右の眼で左の眼が見えるだろう」とからかったそうですが、夫人はまた始まったと笑っていたとのことでした。

注①菅沼夫妻が鵠沼に住むことになったのは昭和26年（1951）。

②菅沼五郎氏が亡くなったのは平成11年（93歳）、夫人は平成15年（84歳）。

③幸子夫人の養父牧野田彦松氏は天津で軍部の中国語通訳をしていた。しかし、中国人に親切すぎて首になり、その後は日本租界で本屋をはじめた。

④幸子さんは5人兄弟で、姉が魔子、妹がエマ、ルイの2人、一番下が弟のネストル。この弟は生後わずか1年足らずで夭折した。

⑤伊藤野枝は大杉と結婚する前、辻潤との間に…（まこと）、流二の男子二人をもうけていた。幸子夫人が兄というのはこの二人のことである。

⑥50年目に碑文が見つかったのは、事件発生50周年を記念して慰霊祭を名古屋で行なったときのことである。

⑦大杉栄・伊藤野枝は関東大震災（大正12年9月1日）の混乱のさい、9月16日当日連れていた甥、橘宗一と共に憲兵隊に拘引され、その日のうちに3人とも扼殺された。のちに軍法会議の結果、甘粕正彦憲兵大尉が首謀者とされたため、一般にこの事件を「甘粕事件」と呼ぶ。当時はまだ戒厳令下であったので言論統制が厳しく、いまなお真相不明とされているが、瀬戸内寂聴『階調は偽りなり』（上下、文芸春秋刊行）の下巻には多くの資料によってこの事件の経緯が詳しく描かれている。

私と鵜沼宮之前の祭囃子

小林偉利（鵜沼神明在住）

私が祭囃子を始めたのは、1940年頃、9歳の時でした。その頃は8月17日の鵜沼皇大神宮の祭礼が終わりますと、4年に1回8月22日頃から9月末日まで祭当番の家で丸太や板で張出しという板張りの床を作り、その床の上で祭囃子太鼓の練習をしました。太目の竹の棒に麦わらを巻き付けたもので、よく弾みますが、大きな音がしないので、練習には良かったようです。最初は太鼓言葉を覚えます。それをきちんと覚えてから、太鼓棒で麦わらを叩いて練習をします。曲目は昇殿・神田丸・鎌倉・師調目・急囃子・新囃子と習っていきます。9歳で小太鼓を、13歳で大太鼓を覚え、17歳で笛を覚えました。昇殿・神田丸・鎌倉・師調目・急囃子は、古い時代から演奏されていて、そのお囃子は明治生まれの人たちで渡辺孝さん、大橋栄太郎さん、渡辺鶴吉さんらに教わり、特に渡辺鶴吉さんは、笛の指の練習には、冬の寒の内にバケツに水を入れて、その中に指を入れ、凍えた指を動かす練習をすると、暖かくなると自然に指が動くようになるといわれました。私もその気になってバケツに水を入れ、その中に指を入れ、練習をやってみました。そして新囃子は大正生まれの人たちで、太鼓を関根常吉さん、高橋高次郎さん、宮崎兼吉さん、笛を青木喜平さん、高橋新太郎さん、関根福松さんたちに習いました。

鵜沼宮之前の祭囃子の曲目は、昇殿・神田丸・鎌倉・師調目・急囃子・新囃子ですが、一時期、昇殿・鎌倉等は演奏されなくなりました。しかし、30年ぶりに弟隆三郎と共に復活させ、演奏しています。私は後世に祭囃子を残そうと思い、太鼓言葉と笛言葉を紙に書き留め、カセットテープに声を吹き込み、10本くらい宮之前の有志の方々に置いてきました。藤沢・鎌倉・茅ヶ崎あたりの祭囃子は、相模囃子の中の曲だそうです。私が持っている笛は、横浜の日吉で篠笛を作っている笛師、久保井朗童師の作です。その朗童が古書などを調べたりして相模囃子についてこのように語っています。源頼朝公が征夷大將軍に任じられた時に、家来の畠山重忠・工藤裕経・岡崎四郎等がお祝いの囃子を作ったのが始まりのようです。昇殿・神田丸・両国宮昇殿・儀昇殿・大間昇殿・金沢昇殿・鎌倉田歌・師調目・破矢・急囃子・岡崎、この岡崎という囃子は、岡崎四郎が作ったといわれています。現在のひょっとこ踊りの囃子です。

現在、私たちが演奏している鎌倉という囃子は、私は祭囃子の組曲ではないかと思っています。最初は静かな田園風景「田歌」、それから師調目で意気盛んにして「破矢」、急囃子で戦の場面に移ってゆく曲ではないかと弟の隆三郎と話をしています。私はこの古いお囃子、昇殿・神田丸・鎌倉・師調目は、故郷の音が聞こえてくるような感じがします。

以上が1940年から2002年までの私の知っている祭囃子のすべてでございます。

（こばやし ひでとし）

鵠青会の思い出

会 員 内 田 英 一

私は、昭和24年3月学業を終え、更に就職する迄、戦後の数年間を鵠青会の一員として過ごしました。

今、当時の事を懐かしく思い出し、会の有様を書き記したいと思います。

鵠青会とは鵠沼青年会という意味であります。会員は鵠沼東部、南部、西部の三地区に居住する青年であります。

数度の有志による事前打ち合わせの後、昭和21年春に当時の南部クラブに於いて30名ほどの青年が集まって発足しました。

文章に作成したわけではありませんが、その時話し合われた事は、

「鵠沼のためになる事で出来る事は無償で行う」

の一点であります。

その他としては、会長に加藤徳治氏（工務店主）、副会長に市川氏（植木業）、小生（学生）の3名が選ばれました。

活動の拠点としては南部クラブ、時により西部クラブが使われました。

どのような活動をしたか、その主なものを列記しますと下記の通りであります。

1. 夏期鵠沼海水浴場（今のスケートパーク前）の救難監視

櫓を建て、日中2又は3名の会員が交替で異常の有無を監視する。

実際に私自身若い婦人の水難を救助した事があります。

2. 一木通りその他主要道路の溝掃除

排水溝にたまった砂を排除して流れを良くする。

3. 駐在巡査への協力

当時は下田さんという駐在警官が1名いるだけで、泥棒が多かったのであります。

下田さんからの依頼により、空き巣狙いの捜査に協力したときは、夜間会員多数が参加し、逮捕に至ったのであります。

4. 正月の獅子舞

戦後の暗い気分を、少しでも明るくしようと、会員による獅子舞の町内



巡回を行いました。大変喜ばれたものであります。

獅子頭を加藤氏、笛を片野氏、馬鹿踊りのひよっこを市川氏、長谷川氏（後の長谷川クリーニング店主。当時学生）、口上役を小生が務めたものでした。

口上役は心付けを戴く係りですが、これは全て会の運営費とし、当時鵜沼には道案内看板がなく、他地域からの訪問者は困っていた状態でしたので、鵜沼海岸駅前に大きな道案内看板を建てたものでした。

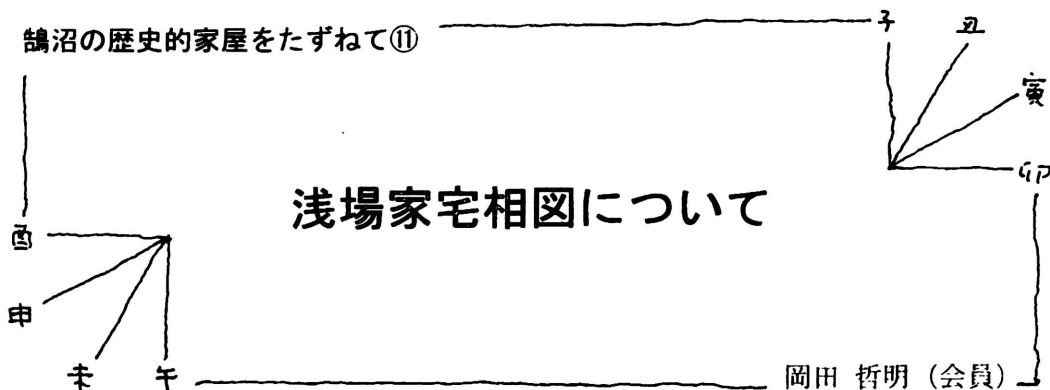
5. 夏祭り時の駅前演芸大会

鵜沼海岸駅前に仮設舞台を設け、飛び入り演芸大会を催し、娯楽の少ない当時の人たちが楽しんだものです。

以上、記憶に残る事を書いたわけですが、強制することなく、会員は良く協力したものでした。

終わりに、憶えている当時の会員名は、下記の通りであります。（敬称略）

加藤徳治、市川、内田（小生）、内田（弟）、金子、村木、田所実、片野、鯨井（板金業）、城田（自転車商）、大貫（学生）、奥津、竹内（大工職）、金子（植木職）、佐々木（学生）、大鍛冶（学生）、長谷川兄弟（クリーニング店、豆腐店）、高梨（学生、植藤）、石黒（蕎麦職）の諸氏であります。（うちだ えいいち）



今、私の手元に一枚の図面のコピーがある。原本は『鵠沼』84号に掲載された《座談会「鵠沼むかし語り」Ⅱ半農半漁村のころの鵠沼》の座談会出席者のひとり、浅場園江さんがその折持参された物である。虫食い、たたみ皺、接ぎ目の糊離れなど原本は少々痛んでいたのを私が預かって補修、裏打ちをしてお返しする際コピーを取っておいた物である。それは吉凶を占うの用いたと思われる家宅の間取りと建物配置図で、ここでは「浅場家宅相図」と呼ぶこととする。

* * *

藤沢の民家

藤沢市教育委員会がまとめた調査報告書『藤沢の民家』（1993年3月31日発行）〔以下、調査報告書という〕には民家分布状況として市内27地区125物件が第1次調査でピックアップされている。建物種別としては主屋、土蔵、長屋門、付属屋などである。調査経過の記述によれば昭和62年度、調査員による市内各地の巡検を重ね、第1次調査の調査計画を作成した。第1次調査では、文化財パトロール員の協力を得るとともに津山正幹・大嶋一人・亀井好恵・黒川敏彦によって第1次調査票に基づく民家の所在確認調査を実施した。第1次調査は、市内全域を網羅するようにつとめた。と、書いてあるが鵠沼地区は1件も調査されていない。これは鵠沼は別荘地区という先入観が調査員にあって当初から鵠沼地区にはたいした民家はないものと調査対象から外されていたのではないかと邪推したくなるのである。

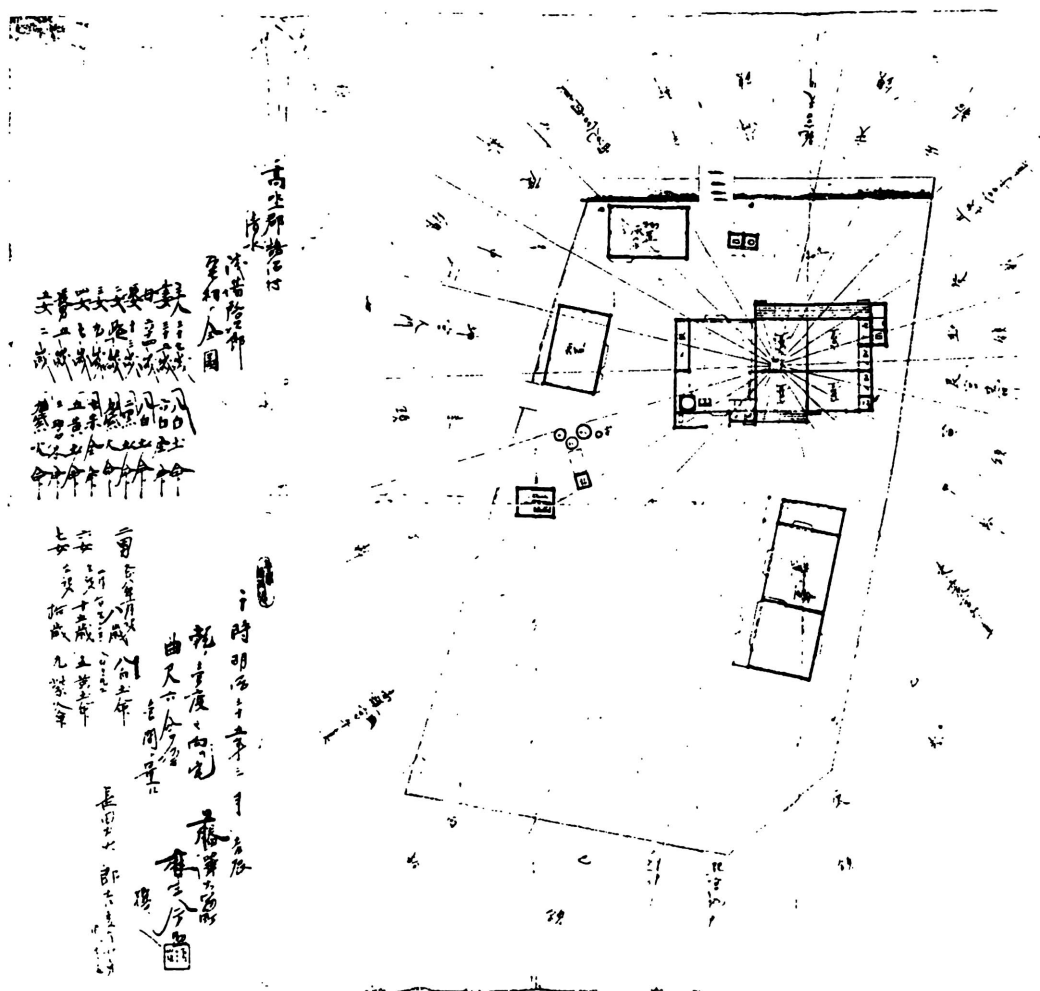
また調査された125物件の建設年代は幕末から昭和初期までにおよんでいる。そこまで年代の範囲を広げるならば鵠沼地区にも調査対象に値する民家はまだまだ現存する。たとえば『鵠沼』82号の本シリーズ⑦でとりあげた「大斎藤の長屋

門」などは本格的な学術的調査がなされてしかるべき歴史的建築物である。

では鵜沼の民家はどのようなであったか。それを知る手がかりの一つが「浅場家宅相図」である。

浅場家宅相図とは

図を見てみよう。ほぼ正方形の紙の右側 2/3 は敷地の形状と間取りの入った主屋、別棟の建物の配置を描いた図面となっており、左側 1/3 はその家の所在と家長の氏名、家族の続柄と年齢、宅相を観た時期、主屋の方位、縮尺、観相者の住所、氏名、捺印がなされている。



浅場家宅相図

内容を以下に書き写す。

高坐郡鵠沼村清水 浅場啓次郎 宅相全図。主人 37 歳。妻、母、長女、二女、三女、四女、長男、五女、の家族全員の年齢と九星を記入。干時 明治三十五年三月吉辰。乾の志度の向き宅。曲尺六分を以て一間（縮尺 1/100 に相当）と量る。

藤沢大富町 麻生今助 之を撰す。印譜は冠帽印が「養福修萬徳」、署名下に「麻生撰」と読める。

また大正八年一月記入として二男、六女、七女の書き込みがある。17 年後に再度、観相を依頼したものとみえ、その間に啓次郎はさらに三子をもうけている。

最後に長男太郎吉亥年二十四歳二黒土星の書き込みがある。亥年二黒ということは明治 32 年生まれであり 24 歳の時は大正 11 年に相当する。

図面のほうの内容を見てみよう。

まず敷地の形状は、ほぼ長平行四辺形の東南角を隅切りした五角形をしており短辺の北西面に水路があり中間や、西よりに橋があつて敷地と通じている。長辺の南西面は道路に面し中央や、西よりに主出入口である門があり、他の三辺は隣地に接している。

主屋は入り口をはいると 10.5 坪の上間、その右手に田の字型に畳の部屋が 4 室（6 畳 2 室、8 畳 2 室）あり、8 畳 2 室に接して廊下、その突き当りに便所。奥の間は 8 畳で床の間付き。上間には殺人と竈がある。

別棟は主屋の西に 6 坪の物置灰家（肥料小屋）と外便所、南西に 6 坪の物置、南に井戸、1.5 坪の小屋（竈つき）、東南には 18.75 坪の蚕室がある。

主屋の中心から 15 度間隔に 24 等分線を放射状に記し、北に子、以下一つ置き時計回りに丑、寅、卯…と十二支を配し、北東、東南、南西、西北を、艮、巽、坤、乾。残る 8 方向には甲、乙、丙、丁、庚、辛、壬、癸を当ててある。

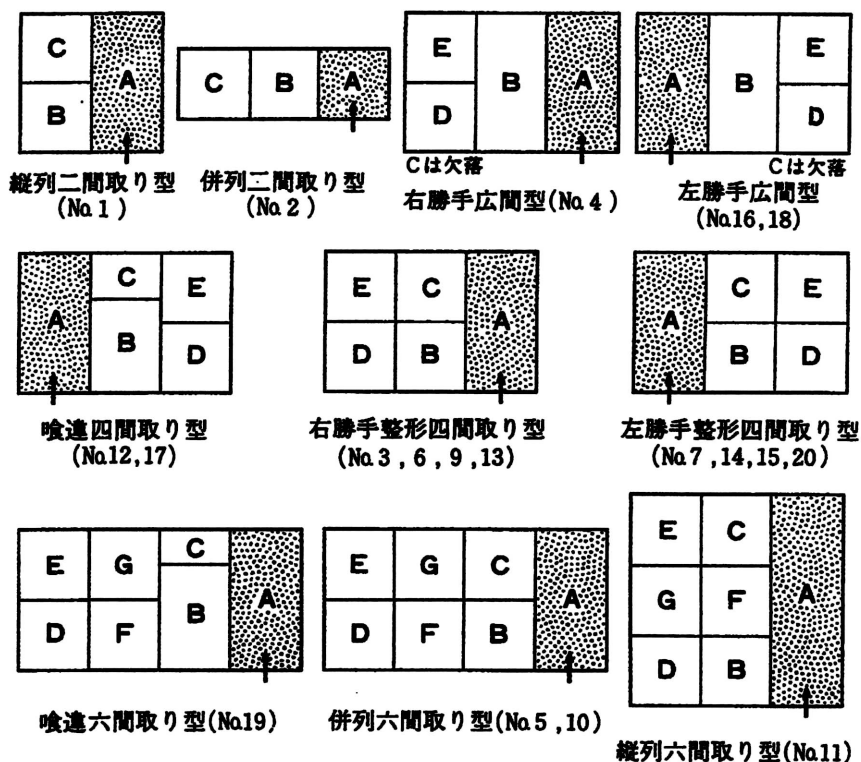
観相をするに当たって、このように細かく方位を分割し、家族の性別、年齢、干支、九星との関係が必要事項だったのであろう。占った目的と結果、その対策を書いたものが別紙で存在するではないか思いと浅場園江さんに尋ねてみたが分からないとのことであった。

民家としての浅場啓次郎宅

浅場啓次郎は浅場園江さんの祖父にあたる。屋号を「諸啓」と称し鵠沼産のサツマイモの仲買人として関西方面に出荷し成功を収めた人であるが、もともと自作農で畑や桑畑を持ち養蚕もおこなっていた。だから家の間取りや付属屋などは

典型的な農家の形態であった。

調査報告書では第2次調査で20棟(No1~20)を選び詳細な調査を行った結果が発表されている。そのなかで「間取り」という一章を設け、広間型、四間取り型、六間取り型などに分類して間取りのタイプの説明がされている。



間取り型のタイプ

- | | |
|---------------|-----------|
| A: ドマ・ニワ | E: ナンド・ヘヤ |
| B: ヒロマ・ザシキ | F: ナカノマ |
| C: チャノマ・カッテノマ | G: ナカナンド |
| D: オク・デイ | |

この分類図によれば左勝手整形四間取り型と右勝手整形四間取り型とあわせれば20件中8件あり40%を占める。藤沢の民家のもっとも一般的な間取りと言えるであろう。浅場家の主屋は左勝手整形四間取り型であり鶴沼地区の民家も他地域となんら変わるところが無いことが分る。現在の浅場家は宅相図にある主屋などは建替えられ、付属屋も取り壊されて、唯一残っていた蚕室も2001年3月に火災により焼失したからこの宅相図のみが証拠資料なのである。

もう一つの宅相図

前記調査報告書に宅相図の写真が一枚掲載されている。小さい写真なのでルーペを使って何とか判読出来たから以下に書き写す。

高座郡藤沢町東坂戸 内田高庸 宅相全図。家族の性別、年齢、九星。曲尺六分を以って一間と量る。維時 昭和三年十二月吉辰。麻生清作、之を撰す。と今助の書式を踏襲して書かれた宅相図である。内田宅は東海道の街道に面した町屋で現在の内田金物店（藤沢市藤沢 1-3-1）である。

宅相図の役割はなにか

調査報告書では家の新築時に家相を見てもらうことがあったようだとしているがそれだけであろうか。

内田家の棟木には明治 22 年と書かれた棟札が調査の際、確認されているが宅相図が作られたのは昭和 3 年である。また浅場家の場合おなじ図面を使って明治 35 年と大正 8 年と大正 11 年と三度の書き込みがされている。

これはその家にとって何か大きな行事を行おうとするとき、吉方や吉日を撰んで貰うのに宅相図が使われたのではないかと私には思える。特に長男太郎吉亥年二黒二十四歳という三度目の記入は嫁を迎えるに当たっての吉日撰びではないかと想像される。どなたか宅相図の役割をご存知ならばご教示頂きたい。

観相家 麻生今助

麻生今助は大山に享保の頃から続いた老舗「油庄」こと油屋庄兵衛の五代目に当たる。「油庄」は油類、日用雑貨を商う傍ら、金銭御用達をもしていた。安政元年暮、四代目庄兵衛のとき大山の宿坊から出火、堂宇民家全てが焼失し、四代目は売り掛け金二万五千両の回収をあきらめ藤沢宿大富町（いまの西富）に移り住み「^{もさいや}西屋庄兵衛」として再出発した。その子、今助は風流人で家業を継ぐかわら、華道、琵琶三味線、俳諧、易占などをよくした。なかでも宏道流生花は家元であったから近隣の子女に華道を教え、藤沢宿の旦那衆の俳諧師匠、八卦による観相などをしていた。内田家を観た麻生清作は息子である。親子二代に亘って観相家として近隣に知られていたのであろう。八代目つまり今助の曾孫にあたる麻生泰弘、和宏両氏は西富に現在も住んでおられ、八卦に使う筮竹や算木、製図を書く道具が家にあったという。このような宅相図はまだほかにもある筈なのでご存知の方があればこれもお知らせ頂きたい。

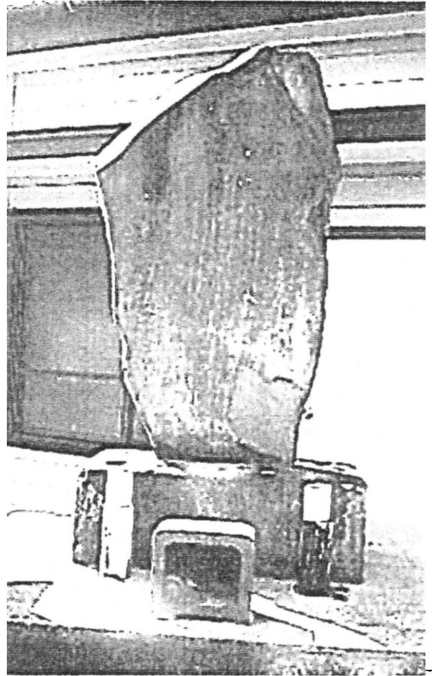
（おかだ てつあき）

「首塚」の碑と野村 靖

松岡 喬(会員)

鵠沼神明3丁目、空乗寺と万福寺の間あたり、宮ノ前公民館の前に「首塚の碑」があることは知っていたが、ある日自転車で前を通って題額を見ると「首塚」との題の後に野村靖とあった。「ことによるとこれはあの野村靖では」と思い調べてみることにした。「あの野村靖」というのは私の曾祖父、つまり父方の祖母松岡初子の父のことである。この人が神奈川県令だったことがある、と聞いた事があったので、その在籍期間にこの碑が建てられたとしたら、まず間違いはないと思われた。

碑の建立は1879年(明治12年)4月とある。さて在籍期間は——神奈川県史人物編によれば「1876年3月神奈川県権令に就任、1878年2月県令に改まる。……1881年駅逓総監に転じ……」とある。「ビンゴ!」といったところだろうか。



「首塚」の碑 2004年1月撮影

1871年(明治4年)の廃藩置県から1876年(明治9年)の大廃合を経て当時の神奈川県はおよそ今の神奈川県に三多摩を加えたものであった。

(1893年多摩三郡を東京都に移管)神奈川県は東京・京都・大阪の三府に次ぐ筆頭県と位置付けられており、いわゆる大物が県令に就任している。初代・陸奥宗光、次代・大江卓、3代・中島信行である。4代目が野村ということになる。

野村靖は物静かな文人タイプで、書に堪能であったとされているから、県令として「首塚」の題額を依頼されたのであろう。残っているものがあるかどうかはともかく多数依頼されたものの一つであろう。神奈川県令就任以前も、おそらくその後も神奈川県とは大きな関係を持たなかったであろう彼にすればこのときま

だ生まれていない五女初子（1987年（明治20年）生まれ）がやがて鶴沼に住み、子孫のはしくれがこの碑のそばに住んでいると知ったら苦笑することだろう。



その子孫のはしくれとして野村靖の経歴について書いておこう。

野村靖は「勤皇の志士」と言われる人の一人である。彼は1842年（天保13年）山口藩士入江嘉伝次の次男として長門国萩に生まれた。幼名を和作という。（私は祖母から「元服して小吉と名乗ったが維新後「格好が悪い」と言って靖と改めた、と聞いたような気がするが、資料野村靖（逓信大臣時代）の裏づけはない）兄は入江九一である。明治維新に先立つこと26年であった。この入江家というのは無給通士という身分で、いわゆる足軽であった。（父はよく「入江、野村と言ったってついこの間まで足軽、草履取り」などと言っていた）野村靖は親戚の野村家に養子に入り家督を継ぐが、この野村家も扶持方二人（米2石4斗）という貧乏侍であった。

ちなみに藤沢周平原作・山田洋二監督の「たそがれ清兵衛」という映画の主人公真田広之演じる清兵衛はたいへん貧乏に描かれているが、時代も同じ幕末で彼の石高は50石ということになっている。

とてもうだつが上がりそうにないが、時は幕末、所は長州である。靖は五つ違いの兄の後を追って吉田松陰の松下村塾に入門した。兄の九一は弟と違って血氣盛んな行動派で、武闘派でもあった。九一は高杉晋作、久坂源瑞らと奇兵隊を組織して京都に赴き、いわゆる「禁門の変」で負傷のうえ切腹して果てた。維新まであと4年のことであった。実はこのことが靖の運命を大きく変えることになった。彼は「維新の英雄の弟」の地位をも獲得したのである。1866年（明治4年）岩倉具視大使の欧米視察に随行し、帰朝後外務省に出仕した。文武の文を得意とする弟の出番が来たのである。

神奈川県令を離れたあと靖は順風満帆とも言える人生を送る、以下順に記しておこう。

1881年（明治14年）駅逓總監

1887年（明治20年）子爵となる

1888年（明治21年）枢密顧問官

1891年（明治24年）駐仏公使

1894年（明治27年）内務大臣（第二次伊藤内閣）

1896年（明治29年）逓信大臣（第二次松方内閣）

その後は明治天皇の娘である富美宮、泰宮両内親王の養育掛を長く勤め1909年（明治42年）鎌倉御用邸にて没した。松岡静雄、野村初子の結婚の翌年であった。

1980年に出された「藤沢市史・資料編第3巻」にすでに「碑文は細字で彫りが浅いために読みにくい」とある。今はさらに風化が進んだうえ、剥落部分も多くなっている。碑の材質は根府川石である。この石は「安山岩系でやわらかく加工しやすいが風化もしやすい、歌碑や句碑に適する」とされる。なぜ根府川石を使ったのかというのはこの文が平仮名であることに関係がある。元来碑文というのは公式の物であるから漢文で書かれるのが普通である。（賀来神社の碑文は「首塚」の碑より40年も後のものながら漢文である）漢文であれば硬い石（たとえば花崗岩）に刻みつけることが比較的容易であるが、平仮名となるとそうはいかない。そこでやわらかい石が選ばれるのである。根府川石の「歌碑や句碑に適する」というのは「平仮名用」ということなのだ。

実際に風化と剥落は進み、新たにこの碑文を読み下すことは不可能である。（ましてや何の知識もない私などには）そこで以前に読み下されたテキストを探すわけであるが、我が「鵠沼を語る会」の大先輩伊藤節堂氏が「鵠沼10号」（1980）—当時の「鵠沼」は手書き、青焼きコピーであった—に発表されたものが「鵠沼」合本に転載されているというのは知っていた。註に「欠落部分は藤沢市史資料によった」とあるので探してみると、「藤沢市市史資料集・第3巻」（1980）に服部清道氏による読み下しを見つけたことができた。この二つのテキストには多くの相違点があり、どちらの解釈が正しいのかということを中心として2月の例会でお話をさせていただいた。ところがすぐに佐藤会員から「最も古い読み下しはこれではないか」と加藤徳右衛門著「藤沢郷土史」1933年（昭和8年）を教えていただいた。渡部会員からは故有賀蜜夫氏が書写した「首塚の碑」を見せていただいた。（結果的には有賀氏のものは「藤沢郷土史」を書写したものと判明した）私は前記二つの資料を参照して「鵠沼10号」の再改訂版として本文の末尾に掲載する予定でいたが、それより古い資料、それも前二者が参考にしたであろう資料が出てきたので、「それではこの間の例会での話はなんだったのか」というおしかりは甘受しながら、もう少し研究を続けてまたの機会ということにさせていた

だきたい。

碑文の文章形式は「和歌の詞」と呼ばれるものである。「和歌の詞」とは末尾に和歌をおいて、その前に「なぜその歌が詠まれたのか」という事情や経過を「けり」による叙述によって順に説明してゆく文章形式で、代表とされているのは「伊勢物語」（950年頃成立）である。この碑文は王朝文学のスタイルを取っている。ずいぶん復古調的な話だが、これも王政復古などと言って宮廷文化が再認識されたこの時代ならではの言うことだろう。

碑文の内容だが、御世（今の世の中）を讃えるものとなっている。1879年（明治12年）といえば維新の混乱期をようやく脱した時期で、最大の内乱である西南の役は前々年のことであった。しかしこの時期は維新政府による三大改革（学制・徴兵制・地租改正）に対する反発もあり、官の側からすると「上下協和」や「輿論公議」を重視せざるを得ない状況であった。「いまや文明の御世にあひ」「我も人もなみ風たゝぬ御世にうまれて」「みよのひかりにあらはれにけり」など必要以上に時代に媚びているような気もするが、素直に受け取れば封建時代がようやく終わったことをよろこぶような内容である。ちなみにこの頃の鵜沼村の人口は2000人程度であった。

ところでこの碑のことを「首塚」の碑と書いてきたが、そもそもこの碑はそばにある塚「首塚」の由来を書く説明文である。「市史」にも「いまその塚はない」と書かれているからとつくになくなってしまっていたのだろう。そうなるこの碑はないものを説明する、食べてしまったインスタントラーメンの袋の「作り方説明書」のようになってしまっている。表面の風化とあいまって寂しさを感じさせる。

もし古老にこの「塚」を見られたことのある方がおられたらお話を伺ってみたい。「ふるくよりある塚」は直径3m以上、高さ1.5mくらいのかかなり大きいもので円墳状のもので碑の後側（まさに公民館の建物のところ）にあったのではないかと想像している。そのくらい大きなものでなければわざわざ碑など立てなかったのではないだろうか。

曾祖父の名が刻まれたこの石碑の寿命も長くないような気がするが.....

（まつおか たかし）

鵜沼松が岡の開発と大給家について

有田 裕一（会 員）

鵜沼の歴史は本村においては古く、天平7(735)年、相模国司、相模国封祖戸
交易帳にその名が表れたのを始め、天養記(1144年)に記された「大庭御厨おおばのみくりやの乱入
事件」以来でも800年以上を数える。

しかし、ここ鵜沼一帯は「砥上とがみヶ原」と称され、明治15年参謀本部陸軍測量局
作成の地図を見ても、本村に住む漁師が海へ通った浜道や、鵜沼新田から海へ出
る新田道が砂丘沿いに見えるだけで、その砂丘の東側は樹木のあまりない荒れた
地帯だった。

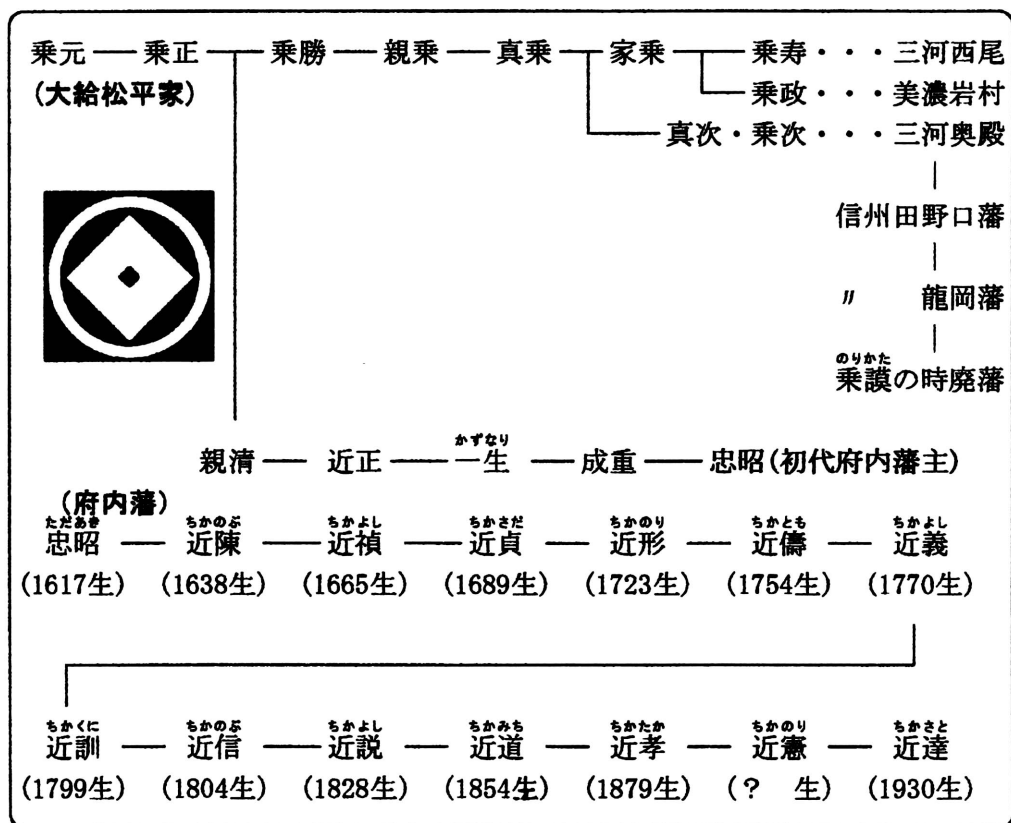
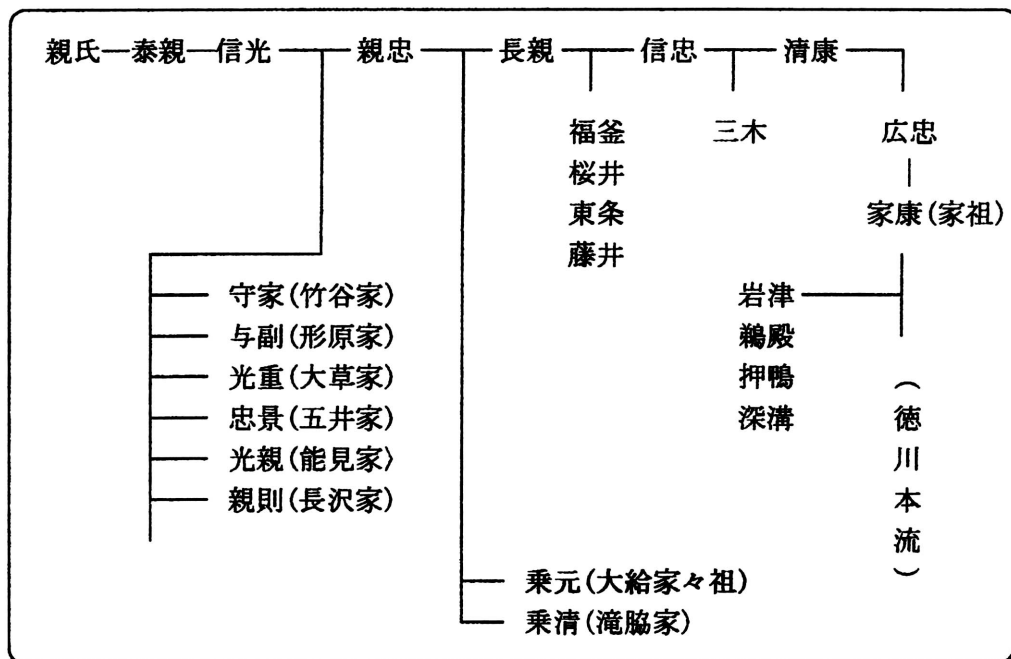
これが明治20年代になり、鵜沼海岸が急激に開発されたのは賀来神社の称功碑
に記されている伊東将行他諸名士の方々の御尽力による所が大きいのであるが、
この碑には記されていない影の立役者、大給家についてここで調べてみたい。

大給家は、15世紀前半～16世紀後半に分出した、いわゆる「十八松平」と呼ば
れる一族のひとつであり、早くから松平宗家（徳川氏）に仕え、三河国西尾、美
濃国岩村、信濃国龍岡、豊後国府内と各松平家を輩出した。

鵜沼に関係のあった大給家は江戸時代において豊後大分府内の二万一千石を有
する譜代大名で、明治維新後、松平から改姓して大給となり、子爵の位を叙せら
れていた。その系譜は徳川家康と祖を同じにするものであり、別図に示したとお
りである。

これによれば徳川家康の先祖、信光の孫、乗元が三河大給の土地に住み、大給
家をおこした。この六代目家乗は慶長6年美濃岩村二万石に移封され、あとをつ
いだ乗寿のりながは正保元年、上野国館林6万石に転封、老中に昇進した。この家系の中
で乗邑は老中として將軍吉宗の享保の改革に協力し、その孫、乗完は11代將軍家
斉の時、松平定信と寛政の改革を推進した。（これが三河西尾の家系である）

さて府内(大分県)松平大給家の家系を見れば、天正18年松平(大給)近正は五千
五百石を領して上野三之倉を居所としたが、慶長5(1600)年、関ヶ原合戦の前哨
戦として知られた伏見城の攻防で戦死。その功で一生は下野国都賀郡板橋に一万
石万を与えられ、大名となった。その子、成重かすなりは大阪の両陣に出陣し軍功をあげ、



1615年三河国幡豆郡二万石の城主となる。更に1619年丹波桑田郡亀山で二万二千石の城主となった。

1633年その成重が没すると、その子忠昭は豊後へ移封となったが、丹波から豊後へ下った忠昭の領地には城がなかった。

府内では藩主、日根野吉明が1656年病死、同家は断絶となった。府内藩は戦国大名、大友宗麟が君臨した土地である。府内城は、日根野家の断絶により、幕府の管理する所となり、1658年その府内へ移封せよとの命が忠昭に下った。当時江戸在府中であった忠昭は直ちに帰国し、府内城に入った。府内藩主、大給松平氏の始まりである。

その後、府内大給松平家は初代忠昭より、二代近^{ちかのよ}陳が二万二千石をもって跡を継いでから以後192年間(貞享4年に淡路町一丁目が拝領地となってから181年間)、九代の藩主が継ぐのであるが、九代近信に継嗣がなく桑名藩主松平定永の七男近^{ちかよし}説が十代を継いだのは、嘉永7(1854)年であった。

十代近説の時、明治維新を迎え、これにより松平の姓から明治2年大給の姓になった。 鶴沼の大給氏は、その子近道と孫近孝で、子爵の位であった。

近説は、城持ちの譜代大名で、二万一千石の石高、慶応3年の武鑑によれば、朝散太夫左衛門尉。詰間は「帝鑑の間」の伺候であった。

ちなみに、大名家263家のうち、御三家は「大廊下」(1.1%)、4家が「溜の間」(1.5%)、29家が「大広間」(11%)、65家が「帝鑑の間」(24.7%)で、ここまでの38.7%。あと「柳の間」(78家)、「雁の間」(38家)、「菊の間縁側」(30家)、不明16家であった。

10代松平左衛門近説は、間もなく寺社奉行に任ぜられ、慶応3年7月には若年寄となり、淡路町一丁目の上屋敷から幕府に出仕することになった。歴代の府内藩主で、この職に就いたのは、10代の近説ただ一人であった。

近説は大政奉還の翌春、慶応4年2月6日、幕府に願って若年寄を辞し、淡路町の江戸藩邸を去り、上洛途中、3月20日、駿府で征夷大総督、有栖川宮熾仁親王に朝命遵守の誓詞を奏呈したのである。

そして、明治5(1872)年、淡路町より本郷駒込千駄木坂下町に移り、明治17年の華族令により、近道は子爵となった。そして、明治20年には、第23国立銀行(現大分銀行)の取締役役に就任している。

また、この頃、三河奥殿系の大給松平家は、文久3年、三河より信州田野口に移り、(後に龍岡と改める)明治に至る。11代乗^{のりかた}護は、大給 恒^{ゆずる}と改名、伯爵の位

になった。

恒は和漢の学問を若くより修得し、後、蘭学、フランス語、火砲、築城などの洋学を修め、幕府においては老中格、陸軍総裁になり、明治政府において元老院議員を務め、明治10年、西南戦争が起こると元老院議員であった佐野常民他数氏と力を合わせ、戦争による傷病者の救護活動にあたった。しかしなにぶんにも急場であったため、運用資金に事欠き、彼らは私財を投じて赤十字活動にあたったという。そして彼らの創立した博愛社は明治19年万国赤十字社に加盟し、日本赤十字社となった。

恒は、明治11年賞勲局副総裁。明治28年総裁になった。

鶴沼に縁のある大給氏が明治政府の賞勲局総裁であったという説が今までもあったが、これは龍岡藩の大給 恒氏のことで、ここで訂正しておきたい。

また、恒氏の家系である品川区にお住まいの大給義龍氏に、2003年、会員の鈴木三男吉氏が電話でお話を伺ったことがある。この時、義龍氏は87歳。恒氏の子息の名は左^{さだ}といい、世田谷区用賀にお住まいで、生涯独身であったそうである。

このため、左氏が73歳の時義龍氏が16歳で養子として大給家に迎えられ、現在に至っている。もちろん、義龍氏は三河奥殿系の家系であるので、鶴沼におられた大給家ではなかった。

さて、鶴沼での大給家の活動は、11代近道氏(安政元年～明治35年)と近孝氏(明治12年～昭和33年)の時代である。私がこれまで大給氏なる人物を調べてきたのは、先に示したように、鶴沼南部は砂の荒地だったが、百年足らずの間に日本でも有数の住宅地となったのはなぜか？ 徳川時代天領だった鶴沼の地がなぜ大給家が所有することになったのか？ なぜ開発して分譲することになったのか？ 大きな疑問を長い間持っていたからである。

これを受けて会誌「鶴沼」73号に所載の日本建築学会正会員である牧田知子氏の論文によれば「鶴沼海岸周辺は幕府の射撃訓練場だったこの一帯を管理していた大給家の世襲財産であった。自身としても明治20年代御用邸誘致の構想のもと新しい土地を購入、大給家は土地の水準を上げるため、当時の名士、財閥に土地の購入をすすめた。

しかし明治26年の土方伯爵の推奨により、明治27年御用邸は葉山に決定した。」牧田知子氏は以上のように幕府と関連づけている。

鶴沼海岸に長く住む高木和男氏によれば、明治20年代鶴沼海岸は御用邸の候補地であったようで、大給氏は鶴沼の土地を広く先買いしていたという。その範囲

は鵜沼松が岡一丁目～四丁目で、25万坪以上、一部藤ヶ谷も含む広さであった。

次頁に表した地図の写しは、伊東家と青木家に伝わる畳2帖程の手書きの大地図である。明治28年鵜沼村村長、高松良夫氏から大給近道へ差し出した大給家所有地の地図で、ここに表したのはフリーハンドの写しであって、原本をそのまま縮尺したものではないことをお断りしておく。

大地図の作成は葉山御用邸が決定した後であり、この大地図を作成したといわれる木下家は宮内省の式部職も務めた家柄であったが、利吉氏は若くして没したので、弟の米三郎氏が業を継いだ。

また、米三郎は神官の資格を持ち、出雲大社の権大禰宜の称号を受け、宮内省に出入りしていた所から、旧大名クラスの家の譜請を行っていた。大給氏との関わりもこんな所からでたのであろう。そして賀来神社(明治38年)鵜沼への招聘にも大給氏に力を貸していたに違いない。

御用邸が葉山へ決まったため、その後広大な土地を分譲したのである。その方法は松苗を植え、砂止めをするという条件で3千坪位が単位だったようである。この時の道路の区画が現在の松が岡地区の道路であり、鵜沼の本村が網の目状の地割に対し計画性のある方形となっている。

これを画いたのは岡山の池田家と共に上京、池田家の職人集団「木屋組」の頭をしていた木下利吉氏及び弟、木下米三郎とその弟子、石黒千太郎が中心となって作図したものである。この畳2帖程の大地図の所有者、青木 久さんは米三郎氏の息女である。明治28年生まれ of 久さんは、『藤沢市史研究』第23号の昔語りの中で「大給家の別荘は湘南学園の近くの高い山一帯で二階建てだったが一夏ぐらいしか来なかったようです」と話しておられる。

さて、時代は遡り、六代藩主近^{ちかとも}寿は安永8(1779)年8月封地府内にある賀来神社の祭神、善神王の分霊を江戸表屋敷に勧請したのであるが、この位置は現在の淡路町一丁目5番地にあたる。(賀来神社は大分市賀来に鎮座し祭神は善神王(武内宿禰命)で承和3年で当地に鎮座したと伝えられ、旧県社である。例祭は9月6日、神木は樺(市銘木指定)。

明治32年の新撰東京名所図絵には次のように記述している。「賀来神社は淡路町一丁目の表通りにあり、元松平左衛門尉上屋敷内の鎮守なり。同氏旧領地豊後国大分郡賀来村において承和3

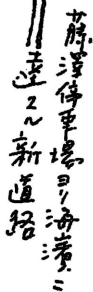


(836)年の創建に係り、安永8(1779)年これに移

大給松平家の信奉を得た賀来神社

上藤各
下藤各
下 181

之中大給近道所有地圖



士也
圖

して座敷内に勧請す。明治5年旧邸地は悉く市塵^{してん}となりたれど、祠堂はなお現存せり。」とあり、この時は未だ祠堂は残っていたようである。いずれにしても明治5年には淡路町の府内藩の地は官収され、邸は解体された。大給家でもとりあえず神社御神体を千駄木坂下町にあった下屋敷に移したが、この邸は狭く神社相殿などを移築する余裕はなかった。

その後明治38年に至り、近説の孫にあたる近孝によって、神社は淡路町に残された祠堂、石鳥居、石灯籠などと共に鵜沼に遷宮されることになった。

鵜沼の社殿にある石鳥居には文化三年丙寅歳八月と刻まれている。これは江戸表に塩釜神社を勧請した年である。(猿田彦神社、大地主神社、大祖御歳神社、大国主神社と共に)その奥に左右に石垣があり、明治38年と刻まれ、奉納者の中には神社の旧地、神田の人々の名が数本見える。道祖神は鵜沼海岸とあり、こちらに来てから祀られたものである。

清嗽台^{つくばい}には戸田家連中とあり、当時隣地である淡路町二丁目に上屋敷を構えた宇都宮藩主戸田家の人々の奉納であろう。

そして、その後建立された巨大な石碑「鵜沼海岸別荘開発記念碑」がある。これは大給氏の別荘開拓に力を注いだ伊東将行氏を始め、今福元頼、三觜八郎左衛門、金子小左衛門、田中平八、斉藤六左衛門、中野武営、中島行孝、伊藤幹一らの功績を称えている。

しかし、その中に大給氏の名は無い。！！

この碑は大正9年に建立されたものである。地元では伊東家と長谷川家の間の相続関係を取り決めたものだという説もあるが、『横浜貿易新報』（神奈川新聞の前身）の記事を日を追ってみれば、大正8年11月16日の記事は「藤沢の功労者の表彰式及び園遊会を開催」、大正9年3月25日の記事は「金子角之助他長谷川欽一氏らの発企にて彰徳碑の建設に目下奔走中」大正9年7月31日の記事には「伊東将行氏が7月29日没したが、記念碑の建設が未だ半ばである」と報じており、将行氏が亡くなった後、彰徳碑の建設を企てたのではなく、あくまでも存命中に伊東氏の業績を称えたものであろう。

その中に大給氏の名が記されないのは、大給氏が大正6年に鵜沼を去ったであろうと思われる点と、何か地元の人とトラブルがあったのか、また、大給氏が宮内省に関係ある職で、地元の人々と並列で記されにくかったのか、今のところわかっていない。

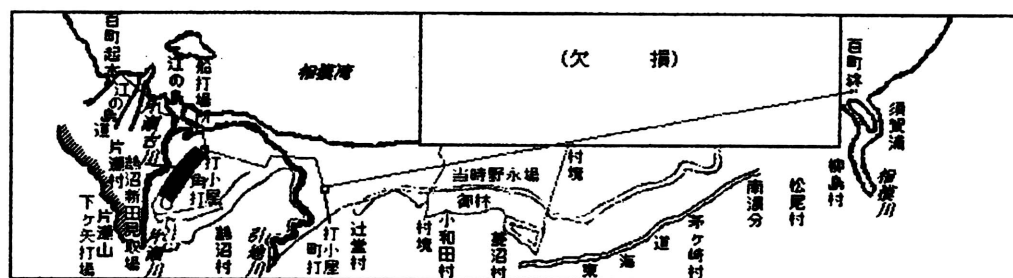
また、なぜ大給氏が鵜沼の土地を所有することになったのかについても、まだ

まだ謎が多いのである。

大政奉還後、明治政府は旧大名などの華族や上級武士に対して公債証券を発行した(明治17年近道は子爵に叙せられていた)。華族はそれを資本に土地を買う行動がとられたとみられるが、鶴沼に限っていえば、なぜ大給氏が荒廃地だった鶴沼の土地を求めたのだろうか。御用邸が葉山に決定した理由は、葉山町の碑にあるようにイタリア駐日公使レナード・デ・マルチャーノの推奨、また皇室との接触のあったドイツ人医師エルウィン・フォン・ベルツの推奨、そして明治22年の横須賀線の開通による、英照皇太后(孝明天皇皇后)の葉山一色にあった有栖川宮邸への長期滞在もあり、皇太后太夫杉孫七郎からの明治天皇への奏上など諸条件が十分考えられる。

この御用邸誘致の情報を大給近道氏がいち早く入手出来たのは親類筋である大給乗謨^{のりかた}(後に恒)氏が陸軍総裁であり火砲などの洋学を修めた関係で、近道氏に話があった、と推察するのは即断であろうか。

また、府内の隣の宇佐郡に旧家、賀来^{かくこれたけ}惟熊家があり、反射炉を持ち、大砲の鑄造に熱心であった。文武の奨励を図りその調練に努めていたという近道氏とこの大砲とは無関係であろうか。



鉄砲場絵図 (通常の地図と違い、上が南なので注意)

「日本財政経済資料」第十巻拾遺によれば、湘南海岸での鉄砲場では三百匁以上の大筒演習を行えと命じている。演習法として、町打(遠距離射撃)、角打(近距離射撃)を中心に船打ちと下ヶ矢^{さげがや}(高所から下方へ打つ)が知られている。町打は辻堂村から柳島方向へ向け、角打は鶴沼村で行われたようである。下ヶ矢は片瀬村駒立山から下方へ向けて打ち下ろされたようである「風土記稿」。

そして鶴沼における大給氏は不在地主という説もあったが、青木久さんや他の言い伝えに基づいて、鶴沼6735番地の旧土地台帳の謄本を取り寄せた(別表参照)。

4-1-11

[illegible]

これによれば、どの枝番の台帳も大給氏の名が見られ、明治35年の記録では近道氏の名があるが、近道氏はこの年亡くなっているのです、その後は近孝氏に所有が移っている。そして大正6年8月28日付で土地を手放していることがわかる。この時が大給氏が鵠沼を去った日であろう。

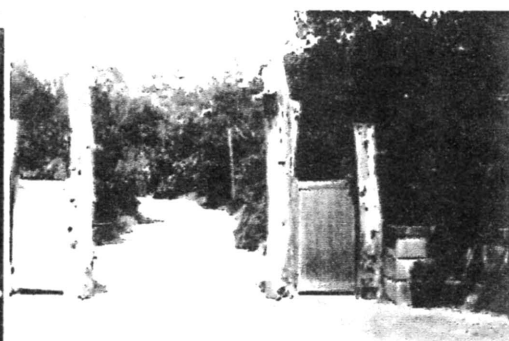
この様に所有期間が比較的短く、しかも伊東将行氏と所有が前後している。ここに表れた事実は大給氏は別荘を開拓の根拠地として所有したのであるが、開発が思わしくなく、寒川村の長崎氏、鵠沼村の山口寅之輔氏、東京の殖産業者、宮崎寛愛氏へと別荘の所有が移っていったと見られる。

大正8年から鵠沼下岡6735番地、旧大給邸に住まわれた宮崎家(宮崎通り土地提供者)のアルバムから、当時東京烏森神社前の写真館に撮らせた写真が発見されたので、ここにそのうちの何枚かを掲載する。

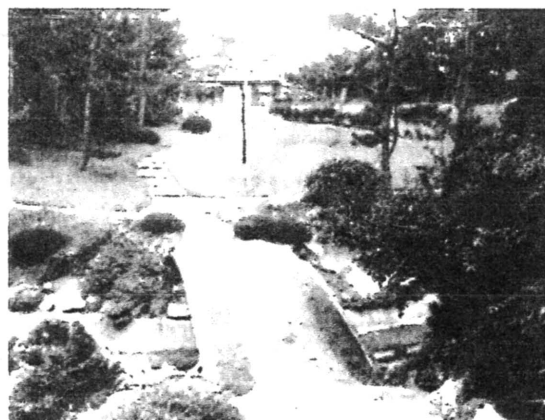
もう一つ鵠沼での大給近孝氏との動きを示すもので、画家黒田清輝記念館の黒



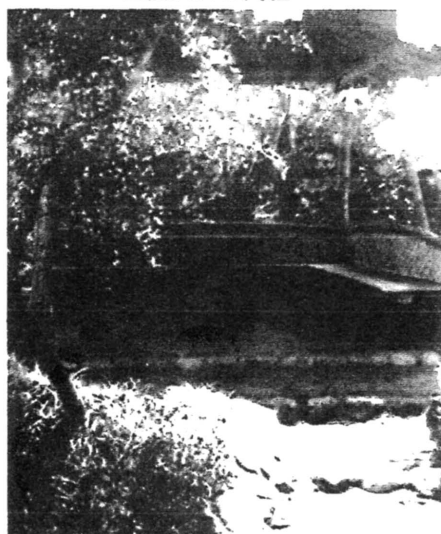
現在も一部残る学園通りに面する大谷石の石垣



正面入口の門柱



↑庭園の小橋



あずまや
四阿の一部→

田清輝日記(鎌倉)にその名が表れているので、参考までに記しておこう。

大正3(1914)年8月15日

八月十五日 土 晴 一昨日以来暑熱減退セリ (鎌倉)

今明日舊ノ盆ニテ職人等休ム 午前中新聞ヲ讀ミ又大槻子ト語ル 午後二時半頃大給子鵠沼ヨリ來訪 晩食後二氏相携テ去ル 時ニ八時前也 午後雲ノ圖三枚畫ケリ 正木校長ヨリ暴風雨ノ見舞ヲ兼南瓜ノ禮ニ來ル

また、昭和14年4月、60歳になった近孝氏が大分の全国菓子大博覧会の名誉総裁に列している記録もある。

最後になったが、最近初めて兵庫県にお住いの現当主大給近達氏から、鵠沼との係わりに関する質問に対する御返事を頂いたので、まとめとして記録しておく。

「鵠沼の件は三代前の大給近道の時代でありますので、関係書類は戦時中に消失したと思われます。また祖母の米子の語ってくれた話では、鵠沼の別荘は何回か使用したようですが、事業が不成功に終わり、大給の別荘も売却せざるを得なかったといっておりました。

当時は交渉事も執事長が取りまとめておりましたので、詳細は不明です。鵠沼開発には多額の出費をしていたようですが、回収もできなかったのが不成功となったと評価したものと推測します。」

この様に大給家においても、鵠沼に存在する資料においても、鵠沼開発過程の資料に乏しく、謎が多いのであり、今後の研究にまつ所が大きい。

ここまで辿り着きペンを置くにあたり、御指導、御激励下さった会員、鈴木三男吉氏に心から感謝の意を表したい。(ありた ひろかず)

【参考文献】

- | | | |
|--------------------------|-------|--------|
| 『鵠沼海岸百年の歴史』 | 高木和男著 | 菜根出版 |
| 『淡路町史』 | 渡辺浩助著 | 私家版 |
| 『寛政重修諸家譜』一索引一 | | |
| 『藤沢市史』第六卷 | | 藤沢市 |
| 『藤沢市史研究』第23号—鵠沼の思い出—青木 久 | | 藤沢市 |
| 『鵠沼』73号 | | 鵠沼を語る会 |
| 『歴史読本』十八松平家とその後裔 | | 人物往来社 |
| 『明治維新人名辞典』 | | 吉川弘文館 |
| 『日本地名大辞典』大分県 | | 角川書店 |
| 『日本財政経済史料』第十卷 拾遺 | | |

「鵠沼を語る会」活動の記録

(平成15年10月～平成16年3月)

総務委員会

運営委員会 9月30日(火) 12名出席

平成15年10月例会 10月14日(火) 10時～12時 21名出席

議題1. 会誌87号配布。

2. サークル交歓会(10/8)の報告—公民館祭りのお手伝いの件。実行委員会から依頼された駐輪場整理係、パネル撤去係について出席の会員に協力を求めて決定した。
3. 公民館祭りの展示について—内容については9月例会に報告の通り。説明員を交代で常駐させることとし、25、26日それぞれを午前と午後に分けて会員の協力を求め、それぞれ担当者を決定した。撤去は11月に入ってからとする。
4. お話—菊本昭一氏より「鵠沼」87号に寄稿いただいたことを含めて「別荘での暮らし」についてお話いただいた。

運営委員会 10月28日(火) 12名出席

平成15年11月例会 11月13日(火) 10時～12時 22名出席

議題1. 公民館祭りの反省と今後—展示内容については大変好評をいただいた。

特に「写真で見る鵠沼今昔」に興味を持ってくれた方が多かった。アンケートの中には「順路を示して欲しい」との意見もあった。

2. 郷土資料展示室運営委員からの報告—内藤会員より12月1日オープン、16年2月29日まで、テーマ「鵠沼の歴史をひもとく」—発展の概要と公民館の歩み。当会としては資料提供などで協力することとする。また当会の渡部会員が内藤、中島会員に続き郷土資料展示室の運営委員として参加したことが報告された。
3. 新年会について—中島会員より 16年1月20日(火) 11:30～例会に引き続いて新年会を開催する。場所—アコレード
4. 会誌87号について—69冊を頒布して34,500円の入金があったことが報告された。
5. 蓮池について—桑原会員より マスコミ報道の連絡。TBS、J-com 湘南の放送日程。
6. ビデオ鑑賞とお話—10月26日(日)放映のNHKテレビ、新日曜美術館「百人の麗子—愛娘を描き続けた異端の画家・岸田劉生」(協力「鵠沼

を語る会」を鑑賞した。同時に岡田会員より、劉生のアトリエのレイアウトと光線の関係「なぜ右向きが多いか」というお話があった。

新入会員 柴山洋氏紹介

運営委員会 11月26日(火) 11名出席

平成15年12月例会 12月9日(火) 10時～12時 26名出席

議題1. 郷土資料室オープニング企画展示について—予定通り12月1日(月)オープンしたことを報告。なお現在行っている説明員当番は当面継続する。

2. 新年会について—前回案内したとおり、1月20日(火)11:30より1月度例会を引き続き新年会を行う。参加予定者を募ったところ23名、会費3000円を徴収。

3. 郷土資料展示室次回展示について—内藤会員より説明。「長谷川路可と鶴沼」(仮題)3月23日よりの開催に向けて準備中。セキュリティーの問題などから絵の実物は展示せず、写真とパネルによる展示となる。

4. お話—「与謝野晶子の鶴沼の歌」池田成彬氏。同氏は鶴沼藤が谷に在住の与謝野晶子の研究家、このたび江の島に与謝野晶子の歌碑を建てられた。また「江の島歌舞伎」にも造詣が深く、最後に弁天小僧のせりふまでお聞かせいただく大サービスであった。

運営委員会 12月23日(火) 11名出席

平成16年1月例会 1月20日(火) 11時30分～12時 34名出席

場所「喫茶アコレード」

議題1. 「鶴沼」88号について—渡部会員より説明。88号の入稿状況、今後の予定として89号特集「鶴沼と高瀬家の百年」、90号特集「語り継ぐ戦中・戦後の歴史」を考えている。

2. 元会員の著作の紹介—中島氏より元会員の高三啓輔氏の力作「サナトリウム残影」—日本評論社—が紹介された。

3. その他—1月24日「地名の会」の催し「鶴沼の史跡を歩く」が行われる。

(9:30 サンパール広場集合) 当日、東屋については有田会長が説明。

引き続き同じ場所で新年会が開催された。おそらく当会始まって以来であろう30名を越す参加者があり、盛会であった。

運営委員会 1月27日(火) 14名出席

平成16年2月例会 2月10日(火) 10時～12時 32名出席

議題1. 「鶴沼を語る会」案内書に付いて—主に会員募集の目的で、入会申込書と一体化した会のパンフレットが必要と言う意見があった。今回ホームページ掲載予定の「鶴沼を語る会とは」という文書を基本として、竹内会

会員がA4裏表、申込書付きのフォームを作成し、提示した。正式ホームページ開設時まではホームページのURLの掲載を保留するという条件で了承された。

2. 「史跡めぐり」について一中島副会長より「鵠沼の文学散歩」第2回の今回は南部を中心にコース編成をしている。日程は4月6日（火）を予定している。
3. 地名の会の「鵠沼の史跡を歩く」について—1月24日（土）参加者60名で実施された。会として案内などの協力をした。
4. その他—新年会会費の残について—佐藤副会長より「若干の残金が出たので、一般会計に繰り入れたい」という提案があり、了承された。
5. お話—松岡会員より「首塚の碑」についてお話があった。

新入会員 平井真理さん、中川原良子さん紹介

運営委員会—2月24日（火） 12名出席

平成16年3月例会 3月9日（火） 10時～12時 33名出席

議題1. 「史跡めぐり」について一中島副会長が地図にてコースの説明。見学予定は26ヶ所。実施日4月6日（火）10:00公民館前集合、弁当・敷物持参（昼食場所は松が岡公園）雨天延期

2. 会誌「鵠沼」印刷日について—渡部編集長より印刷日は3月29日（月）に決定したと報告、当日の会員の協力を要請したところ14名が名乗りを上げた。
3. ホームページ委員会報告—松岡会員より進行状況の説明、準備作業は大詰めにており4月の例会をめぐりにスタートさせる予定。
4. サークル交歓会報告—佐藤副会長より、2月18日に開催されたサークル交歓会においては「語る会」への他のサークルの関心が高まっていると感じた。「活動状況を知りたい」「公開講座を開いて欲しい」などの要望が出された。
5. 会誌別冊の件—青木会員がまとめた「鵠沼」別冊、今井達夫著作品復刻号が完成し配布された。同時に青木会員から作家今井達夫についてお話があった。
6. お話—渡部会員より画家長谷川路可についてお話があった。パワーポイントを駆使してビジュアルでわかりやすかった。
7. その他—①鵠沼の記事紹介 雑誌「漢九郎」3月9日発行号 ②内藤氏より「路可展」開催中のお弟子さんが参加するセミナー日程と会場。

4/24 第3談話室、5/15 第3談話室 6/5 ホール

編集後記

- *先に3月上旬、青木 悠会員のご努力により、『鵠沼』別冊として『今井達夫著作品復刻号』を刊行することができました。印刷・製本には多くの会員の皆様方が協力してくださいました。感謝いたします。
- *その年譜によりますと、今井達夫氏の誕生日は明治37年(1904)3月3日とあります。奇しくも氏の生誕百周年記念出版の形になりました。
- *さて、88号はいつにも増して盛り沢山のヴァリエティーに富んだ内容となりました。これは、とりもなおさず鵠沼という土地柄の幅の広さを物語ります。
- *今号には中山成彬氏・塚本雅一氏・小林偉利氏と会員外の3氏の玉稿を頂戴しました。記して深く感謝申し上げます。
晶子の詠んだ豊かな鵠沼の松の緑は消え行こうとしています。
- *今号は前号から続きの福永陽一郎の【下】以外は特にこれといった狙いもなく、会員の皆様方の「こんなことを書いてもいいよ」というお言葉に沿って編集したのですが、図らずも面白い法則があるのに気付きました。
- *それは、ある事象に関する二つの対比ということです。すなわち、生物に関して植物のクゲヌマランと動物の桜貝、芸術家に関して音楽の福永陽一郎と美術の菅沼五郎、個人的な回顧に関して南の鵠青会と北の祭囃子といった具合です。もう一つ当初は石碑に関して西の首塚と東の鵠沼海岸別荘地開発記念碑というのもあがっていたのですが、ページ数の関係で後者は次号に廻すことにしました。
- *その次号ですが、『鵠沼と高瀬家の百年(仮題)』ということで、今や「高瀬通り」というバス停にしか名を留めない鵠沼の恩人、高瀬彌一とそれを取り巻く人々にスポットを当てた特集を組むことをたくらんでいます。多くの会員のご協力をお願いします。
- *「鵠沼郷土資料展示室」がオープンし、第2回の企画展として『鵠沼が生んだ世界的画家・長谷川路可展』が開催されています。文士宿、東屋を採りあげてきた当会としては、いずれ必ず特集を組むべき人物だと思います。(渡部)

『鵠沼』 第88号

平成16年 3月31日発行

本誌の記事引用の際は
ご連絡ください

編集・発行 鵠沼を語る会

藤沢市鵠沼海岸2-10-3

鵠沼公民館内

電話0466-33-2002